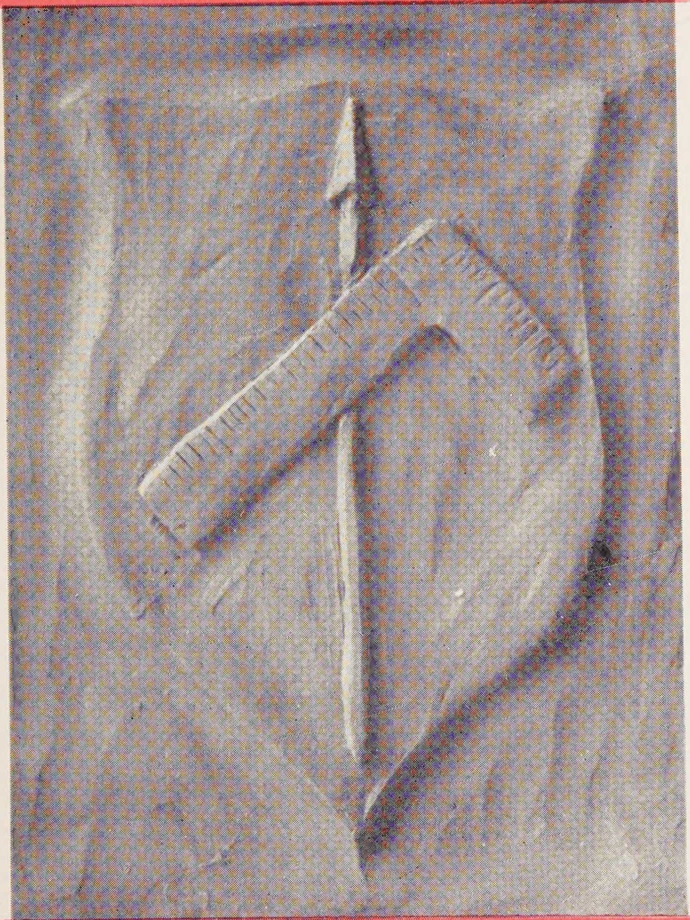
教会教育

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年八月一日発行　毎月一日発行　第九巻第八号



8

1961

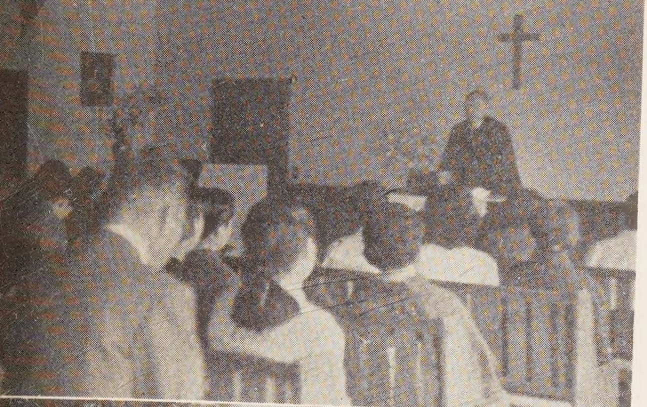
キリスト教教育と科学の問題

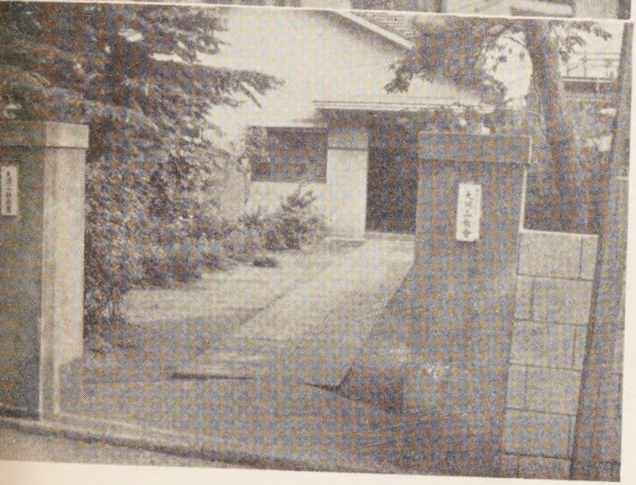
——小中学生の疑問から——

1961 8 目次

急告

郵便料の値上りにともない，やむなく誌代の現状維持が出来なくなりました。9月より定価50円となります。ただし，8月末迄に購読料を一年分納入された方は，1年間450円でお受けします。9月1日より1年￥550 半年￥300です。





日本福音ルーテル

大岡山教会

昭和九年11月11日北千束の借家に宮坂亀雄牧師により伝道開始

同12年8月13日南千束358にて教会設立認可

昭和15年2月5日南千束360番地に牧師館と幼稚園舎を建て、幼稚園広間を集会場教会として礼拝を始めた。教会堂の建物は地所はあるが未だ建築の運びに至ってない。

昭和26年末日宮坂牧師辞任し、昭和27年4月 牛丸総吾郎牧師越任現在に至っている。



キリスト教に対する疑問に
生物学者の立場からの一つの答

矢頭献一

聖書をどのように理解し、各自の信仰と生活の規範にしてゆくかは、聖書をいかに読むかということを教会の権威において公認規定されていないプロテスタント教会では窮極において個人個人の信仰の問題となるから、そこで或る一人の生物学者が或る信仰と考え方とをもっていたとしても、それは許されるであろう。私はここに、私なりの考え方を書いて見ようと思うが、もちろんこれがすべてのキリスト教を信ずる生物学者の信仰という訳のものでもなく、また、そのように理解しなければならないという性質のものでもない。唯、一人の生物学者の信仰の告白として読んでいただければ幸いである。生物学者を代表してなどという大それた考など毛頭もないのである。

編集者から送られて来た数編の「キリスト教に対する疑問」という小、中学生の人達の書かれたものを見て、ここには数多くの問題の含まれていることを知ったが、第一に明らかにしなければならないことは創造主なる神の存在の問題であろうと思われる。「神はいますか」という問いである。これに対する解答さえできればすべての問題もまた解決するのであるが、それだけに困難なことでもある。キリスト者である以上神の存在を疑う理由は無いはずだが、簡単に「神はある」といいえない場合がある。「自然科学的に見て神の存在は証明できるか」と誰かが私に質問したならば「そのような神は絶対に考えられない」と答える。「神はいずこにもいます」はずなのになぜそんな事をいうかと不審に思われるかも知れないが、私はやはりそう答えるより他に方法を知らない。私はこの答が非常に誤解を受けやすい、危険な表現であることを知っている。かつてある集会で私がこういった時、聞いていたある学生が興奮してしまって神の存在を否定する人の話など自分は聞かないといって、その後の話しに全然耳をかしてくれなかったことを経験している。私の話し方がまずかったためであろうと今でもそのことに責任を感じている。しかし、ここで皆さんは私の後につづける話しを聞いていただきたい、私の答えは「自然科学的には」という但書がついているのである。私共は顕微鏡の下に生き物の不思議な生命のいとなみを見る、どうしてこのような巧妙な細胞がつくられ、それが生命現象をいとなんで行くか、とても私共の能力では理解できそうにもない或る力を感じる。しかし、そこに直接に「神の御手の業」を見ることはできない、私共はそれをあくまでも追究して、物理学的、化学的な現象として解析するため努力する。神の御手の業は「美しい花を開く」とか「自然界の不思議な調和」などという現象の中に直接示されているとは考えられないのである。けれどもこのことは自然科学者が神の存在を否定

信じる？ 信じない？

——キリスト教への疑問——

「先生、学校で理科の先生が、聖書のお話なんかおとぎ話だよっていったんです。宇宙は科学的に出来たものだって」こんな声を分級で聞いたことはありませんか。中学生や六年生はあんがいに、心の中でこの疑問とたたかっているのです。皆様方は、どんな答えを彼らにされるでしょうか。

私の家は家族全部クリスチャンです。私は毎日曜日教会に行ってまじめに神様の事について先生から話を聞いて来ました。そして神の偉業を知る事ができました。がある日歴史の時間に「人間の祖先は猿か猿に似た動物であって環境の移り変わりによって進化し今日の人間の姿となったのだ」と聞き私の心に何かつまるものを感じました。背中に背骨があるのがなによりの証拠だと言います。ダーウィンが世の中に発表した時、とてもクリスチャンから非難されたが、でも後の世に受け入れたと言います。私は帰宅し母にさっそくその事を話すと母は人は神様が造ったものだと言います。背骨の事を話すと母はだまりますが、又、後でぜったい神様が造ったもので何より聖書が証明していると言います。私は何とも言いつくしがたい気持です。キリスト教としてダーウィンの考えはどうなっているのでしょうか。

（中学　H）

旧約聖書の一番初めの創世記第二章七節に「主なる神は、土のちりで人を造り命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者になった」と書かれています。

小学校の低学年の頃、わたしは、人間は神様が、ちりから造られたと信じきっていました、ところがだんだん高学年になって、本や理科で読んだり習ったりして、人間は猿のような動物から進化したという事がわかり、日に日に薄れていく「信ずる」ということが惜しくてたまらなくなりました。

この話を単なる聖書に書かれているイスラエル地方の伝説として片づけても良いものでしょうか。

（中学　N）

教会でおそわったことは、私が小さい時の事であったので、すなおにうけ取っていましたが、今は学校で理科などをおそわると、そのいろいろのことが科学的にわかって、どちらを信じてよいかとこまってしまいます。それで、今は科学はそれとして信じて、信仰はそれだけで信じていますが、今後それでよいでしょうか。

（六年　T）

人間はどうしてできたのか、アダムとイブでできたのなら、どうしてみんな違う人種になるだろうか。

（六年　I）

神様が天と地をつくられて動物を作り、それから二人の人間をつくってくださったと聖書には書いてありますが、人間を土でつくってくださったとは本当にできません。信じられないことです。

（六年　K）

神様が宇宙をおつくりになったと聖書には書いてあるが、地球も人間も科学的にできたとしか思えない。それがほんとうなら神様が本当にいると思えない。もし神様もキリスト様もないなら、洗礼をうけてもいいだろうか。聖書には神様やイエス・キリスト様のことが書いてあるが、聖書はいったいどこから伝わったことなのか。神様がいらっしゃらないのなら聖書はだれがつくったのよ。

（六年　M）

れているのであって、その時代の人達がそうした方法を用いて彼等の信仰を告白したのである。現代の我々がこれを科学的教科書でも見るようなつもりでこれを読んでも意味がないのであって、再解釈をもって底に流れる声を聞き彼等の用いた表現の背後にある信仰の告白を読みとらなければならないのである。詩篇第一九篇のあの雄大な神への讃歌でも、そこで太陽が動こうと、地球が自転するのであろうと、そのことが取り上げられているのでない。詩篇にこのように書かれてあるからと忠実なキリスト者はそのように認めなければならないというのは恐るべき独断におちいった結果にほかならない。古代の人たちの理解において書かれた、いわば神話時代の表現の方法から脱け出して我々のものとしての理解がここに必要となってくる。

　魔法使いがいた古い時代の人々は自分の能力で理解できないことはすべて魔法だとか不思議なわざと思ってきた。そのような時代において旧約聖書を書き残した人たちだけが二〇世紀の自然科学者と同様な態度で聖書を書いたとは信じられない、新約聖書はその時代のキリスト者たちが、イエスこそ我等の救い主であるということを後代の人々に伝えるために彼等の信仰において書いたものであることを知らねばならない。

　私が子供の頃、日曜学校の先生で水泳の達人ともいうべき人がいて、よく海を泳いでいては上半身を水上に躍り出して見せてくれたものだったが、彼は自分でもこの位はできるのだからイエス様ほどにもなれば水の上を歩くこと位なんでもないことだと真面目に説明してくれたことがあった。多少水泳に自信のあった私は自分で水の上を歩くことをたびたび試みて失敗をかさね、物理学的にはそれが不可能な事だということを知っていたので、その後、その先生の話しを信用しなくなってしまった。これはイエスの奇跡の証明ではなくて、イエスをただの水泳の名人に引き下げてしまっただけのことである。新約聖書でも或は旧約聖書でもそうであるが、そこに書かれた奇跡などの不思議な現象について、それを書かれた文字通りに信じ込んでいる人達だけが真実のキリスト者であるとは思われないし、何とか理窟をつけて説明し、この通り科学的にも認められる事実だったと云い張ってもその態度がキリスト者として正しいものであるとは考えられない。

　一般にキリスト教の天地創造の教義に対立するものはダーウィンの進化論だと考えられている。そして、そのことからいろんな不幸が生れてくる。私が小学校上級生のころ、アメリカのデートンで有名な「猿裁判」というのがあった。私は当時、科学雑誌に書かれた記事を読んで知ったのだが、テネシー州では公立の学校で進化論を教えてはならないという法律があったらしい、そして勇敢にもその講義をしたスコープスという高校の先生が起訴され、遂に有罪となった事件で、まだ小学校の生徒だった私にはその真相もわからなければ、批判する力もなかったが、ひどく印象に残ってデートンというその町の名前と、その裁判の検察官側にあったブライアンの名前をいつまでも記憶していた。最近のリーダーズダイジェスト誌に当時の被告が思い出を書いているのを見て、以前のことが頭の中によみがえり興味深かく読んだが、この裁判は偏狭と誤解から生じた不幸な事件であったのだった。自分達こそ正統な信仰の保持者であると思いこんで他人の信仰を裁くことがどんなに愚なことであるか、それがはっきりとここに示されている。この思い上りが更に昂じてくると十字軍や、戦争中の日本軍部のように「天に代りて不義をうつ」とんでもないことになってしまう。話が脇道にそれて行ったが学説は進化論に限らず、固定したものではない。また、学説と真理とは全く別物である。生物の体に長い年月の間に次第にその構造なり機能なりの変化が見られることは事実であるが、その変化の現象の意味を説明したもの

する意味のものでないことに十分御注意いただきたい、私のここでいいたいことは、このような方法でもっては、いいかえれば自然科学的な方法では神の存在を証明することは不可能だというだけのことである。また、自然科学によって証明される神があったらそれは聖書の教える神ではないのであるということを云いたい。今ではもう、「現代の原子物理学は神の存在を証明する」などという人はないだろうが、こんな考えで科学と宗教とを結びつけたり、安易に何とか妥協させようとするから種々の誤解がここから生れてくる。自然科学的に証明されるものは自然科学的存在であり、これを追究して最後に到達して明かにできるものは自然科学的原理といったようなものであって、我々のいう神とか、御手の業という意味とは全く異質のものであろう。この意味で神の存在は否定されるのである。これは研究者がその生涯をかけることがあっても、その魂をゆだねるには価しないものである。もし自然科学的な神を認めるとすればそれは結局、石や木を神だとした原始人の信仰と五〇歩百歩の差しかないことになる。自然科学的な方法で神を知ることはできないのである、直接的に人間がその自身の智恵でもっては神は知り得ない存在である、神が御自身、何かの方法でもって私達にその存在を示したまわなければ、人間の智恵や、研究や、情緒などではどうにもならない存在なのである。自然科学の世界の入口に立った、そして科学的思索の訓練も受けていない小、中学生は、今の時代的な環境の影響のもとに「素朴な科学主義者」ともいうべき状態にある。この人達がそこで神の存在に疑問をもつことは全く無理もないことである。

自然の合目性で神の存在を証明するという方法がよく日曜学校（教会）で行なわれた。生物学の範囲でいうならば生物の適応現象を神の計画だと考え、そのような計画のできるのは造物主以外に無いのだといった証明は、生態学が適応現象を説明する学問と解釈されていた一九世紀には通用したかも知れないが適応現象の本質が深く追究されている今日、その設計者を認めることは不可能である。生物がよりよく生活できるために地球の軸をいくらか傾むけて春夏秋冬の四季をこさえた設計者は神であるという説明では、聖書の教える神でなくてもいいことになってしまう。こんな所にいわゆる科学的宗教の生れてくる隙がある。

以上にくどい程にのべて来たことは聖書の教える神は科学の領域の外にあるということであり、同時に自然科学が万能でないということである。

いまの自然科学を勉強したものならこの宇宙が旧約聖書、創世記の初頭に書かれてあるような過程でき上ってきたとは思わない、なぜなら宇宙がどのような経過で発生し、変化して行くかは自然科学の問題であって宗教の問題では無いはずだからである。

聖書は自然科学の教科書でないから、その記述はあくまで聖書的であっても、自然科学的ではないのである。また、聖書は神の言葉であることには異論はないけれど、これが人間の使う言葉で書かれている限り、文章の表面に出ている通り、機械的にこれが神の言葉であるとは考えられない。それは現在の旧約聖書、新約聖書の成立の歴史をふり返って見ればよく理解できることである。聖書に使われている人間の言葉は不完全なものであり、時代によってその意味する内容も異り、言葉づかいも変化してくる。聖書は最初から人の言葉を使って書かれて来たから各国語に訳する必要もあるし、日本で見られるように時代の推移により文章を書き改める必要も生ずるわけである。人の言葉で書かれたということは人間的な表現がなされているということであり、文章を改めるということは時代によっていろんな言葉が使われていたことを意味する、だから創世記が書かれた時代にはその時代の人達の思想なり、或は表現の方法が使わ

「聖書と科学の矛盾」にこたえて

野村　実

はじめに　聖書の記事は今日の自然科学が教えるところと矛盾している。これをどう説明したらよいか、という質問はいまにはじまったことでなく、古くからあったと思います。とくにわたしたち、自然科学にたずさわっているものにとって、たえずともすれば神信頼をゆさぶるものとしてせまってきます。中学一二年、小学六年の生徒児童が、キリスト教に対して抱くこの種の疑問はかれらの半数以上が、学校で教わる科学と、教会で学ぶ聖書との矛盾の壁につきあたって解決に困っているとききます。さもあろうと思います。

まず原理的にいいますと、これは人の心のなかの霊性と理性が分離して、理性が霊性に服従しなくなる現象だと言えましょう。人の精神界にはいちばん深いところに霊性がかくれている。そこには理性がどんなに手をのばしてもとどかない。これを包む生物的存在――肉体も、精神界と別箇のものではありませんが、霊性と理性との性質には、はっきりした差違があります。

理性の能力は考えることで、自然科学にせよ人文科学にせよ、学問は考えるという性能の果実です。教えるということは、人間のなかのこの性能を引き出すことで、知識を注入することではない。教育の成功とは考える能力をそだてることだと解してよいでしょう。教育のなかには、技能を授けるという一面もありますが、それは表面的な見かたで、技能も手先きだけの問題ではありません。禅のなかに、父親の夜盗が、息子に夜盗のコツを教える話があります。その父親は忍びこんだ邸宅で息子を長櫃にかくれさせ、自分だけ先に逃げてかえる。息子を窮地におとしいれ、せっぱつまった境地で自分から逃げ道を考えさせるというわけで、これは教育の真面目を語っています。

学格の教科書は理性を育てるための本で、これによって教育が進めば進むほど、ものの理を考えるようになることは、教育の効果であり当然なことです。人間は理性のおかげで地球が無数の星のなかのひとつであることや、人類は猿類から、いなもっとさかのぼれば、アメーバから、あるいは無生物から進化したことなどの真理を知ったのです。これらはダーヴィンひとりの功績ではなく、人間の理性の貴い遺産です。

ソ連の学者オパーリンが人工的に生物をつくることに成功したことも、科学の進歩で、今後科学がどのように、わたしたちの眼をひらいてくれるか、予測できません。

わたしたちがいま理解している宇宙の構造にしても、将来どのように新しい知見を加えるか、また変更を余儀なくされるか、わかりますまい。科学は日々に新しく、その速度も急速に加わってきました。

ところで、聖書が画いている世界は、聖書が、訳された時代の、つまり人類の科学の眼がまだ開かれていなかったときに、そのころの科学観をもって画かれた世界ですから、い

はダーウィンの進化論に限ったものではなく、いろんな学者が、思い思いの説を出している。そして、その中で、その時代にもっとも合理的な説明をしたものが一応の学説として認められるのである。

創世記の天地創造の記事も、生物学的な或は物理学的な意味でなく造物主と被造物との根本的な関係を説明するのに、当時の人達が信じていた天地創造の説が使われたのではないか。そのように見れば古代人の素朴な天地創造の伝説を頑固に信奉することが正統的キリスト者で、生物の進化の事実を説明する新しい学説が異端であるとして排斥するのは正しい態度ではあるまい。

聖書は本来、信仰の書物である、これを書いた人は自然科学者ではなかった。また新約聖書の中に自然科学者や医者の手になるものがあったとしても、当時の科学的知識と現在の科学的知識との間に大きな開きがあり、またその記者たちもその記事が二千年後に自然科学の論争の中心になるとは考えもしなかったことであろう。彼等はただ、彼等の理解において、イエスは我等の救い主であるという信仰を伝えてくれているのである。だから我々もまたその意味で聖書を読まなければならない。正直にいって私の立場から新約聖書の中には論理的に矛盾する記事が見つかるけれども、それが信仰の書物としての聖書の価値をすこしでも引き下げるものではない。

聖書の中に自然科学的真理を求めようとすることは、あるはずのない所にそれを求める愚行をあえてすることである。このことは聖書の中にしばしば警告されている。実際、使徒行伝の一七章にもあるように、キリストの教えを修養のためになるとか、これもいい教えだとか呑気に考えている間は誰にもよく理解されるものだが、受難と復活とが前面に出てくると、とたんに関心を失う人が多い。しかし、このことは全く自然科学的に説明のできることではないので、ただ、神から示される所を信ずるより他に方法は無いのである。そして信ずるということは科学的な認識とは全然別の意味であることも知ってほしい。この場所に至って自然科学者も、自然科学の領域から全く異った次元の世界へ飛躍しなければならないのである。

数年前に日本の現役の生物学者を百人ほど無作為に選んで、その中にあるキリスト者の比率と、日本全体の人口に対するキリスト者の比率と調べた人があった。勿論、この人がキリスト者であるかないかをその人の日常の行い、教会生活などの面だけで決めてかかることは不合理な話しだけれども、一応、日本全体の比率よりははるかに高い数値を示していた。このことはキリスト教の信仰と生物学的な物の考え方とか決して衝突するものでないことを端的に示すものであろう。

最後に私は今まで述べて来た問題について二、三の参考書を紹介しようと思う。この問題に科学史や、キリスト教史はいずれもいい参考書である。すこし古いが石原先生の名著「キリスト教史」(岩波全書)はぜひ読まれるようにとおすすめする。またこれはだいぶん古いものだがJ・D・ドレイパーの「宗教と科学の闘争史」(一八七四)、A・D・ホワイトの「科学のたたかい」(一八七六)、「神学と科学の闘争史」(一八九六)上下二冊などがある。前者は角川文庫に上下二冊となった訳本があり、ホワイトのものは岩波新書に森島恒雄氏が両著を要領よくまとめて「科学と宗教との闘争」という本にして出しておられる。これには付録にカトリック教会の異端審問所についての解説があり大変に参考になる。いずれも無用な不幸な闘争の歴史である。

以上に書いて来たものを読みなおして見ると、あるキリスト者にとっては異端もはなはだしいと云われるような点も多く見られる。しかし、こんな考え方もゆるされてもいいのではないかとひそかに思っている。

(日本キリスト教団津教会長老、林学博士植物生態学専攻)

書は科学の書でないゆえに、科学として古いといえますが、もともと聖書は霊のことを教える書で、霊にかかわる真理はこのなかに盛られています。聖書が教えるからその内容を高く評価すべしというのではなく、正反対に霊の真理が盛られている故に、聖書であると言いましょう。霊の真理をわきまえるものは霊自身であり、科学の真理を判断するのは科学自身です。人間が所有する霊の書として聖書にまさるものはありません。その聖書は何と教えるか？

　理性は霊性に服従してはじめて真価があらわれるということ、一本の樹の果を喰うなという神の唯一の命令に服従することが、人の最上の価値であって、その価値と美悪を知る知識をうることの価値との優劣を、アダムとイヴの物語りが示し、ここに今日の問題の解決の原理があります。

　知識の果は、見るに美しく、喰うによく、賢くなるには好ましいこと、昔も今もかわりません。そしてそれも神のつくりたもうたもの、神の子にやがては神が与えたもうものでしょう。信頼と服従が全うされた神の子の姿を、わたしたちは遂に失ったわけですが、その正しさ、したわしさは、わたしたちのなかの霊性がこれを証ししています。いまは全き服従が不可能な人間に堕しているわたしたちですが、与えられた理性を霊性の下に服従させて、理性に正しい場所を与えるときに、理性が本来の美しさを発揮するでしょう。

　以上、原理的なことをあまりにながながと記しましたが、これを眼の前の具体的な事象にあてはめ、**解決の道**を求めたら、どういうことになりましょうか。

　まず、聖書は科学の書でなく、その内容は科学の批判の的にはならないことを明瞭にしなければなりません。そうは言っても、天地創造の記載など、あの時代に、なぜ今日の科学者が考える通りに考え得たか、驚くべきものがあります。朝あり夕ありという一日の表現が、二十四時間を意味しないで、何千年か確定もできませんが、自然界発生の過程の順序に誤りはありません。聖書を科学の書として示さないとともに、科学に背くものでないことも知らねばなりません。

　第二に人は科学の進歩と全能を信じやすいけれども、科学は進めば進むほど、未知の世界が広くなり、人間がいかに知らないかを知るという**科学の限界について**、正しく知らねばなりません。これが科学する正しい態度です。理性の目が急に開けると、科学万能、人間の全能を信じ易く、ここにいちばん深いおとし穴があります。

　右は、霊の本性を体験し、あるいは知識の限界を知っている人々のあいだにのみ通用することかも知れません。このような理をもって、失われていく霊性を回復したり、霊性と理性の相克をしずめることは難しいでしょう。

　第三に、わたしはここで、もう一度、教会や母親にそむいていく若い人の現実を眺めてみます。かれらのなかには、疑いを疑いとして、そのまま成長していく幾人かがいます。反抗期というのでしょうか、何ごとにも反抗するあまり、一時教会をすて、母親にしたがわないようになっても、後に、科学的教養を一層深く身につまながらまた元の状態に戻ってくるものがおります。もちろん、何人かは、そのまま幼い日の信頼一本の生活から、まったく離れてしまいます。

　この現象をみると、かれらの心におこる不信は一時的のもので、何の理由によってか、回復する可能性をもっていることを認めてよい。そして、理性が必ずしも、霊性の眼をふさぐものでないということ、失われていく信頼の心を回復させるものは何か、を考えたいと思います。

　この事実からわたしが主張したいことは、**霊性をそだてるものは霊性だけで**、信頼を回復させるものも信頼だけであるということです。人の心のなかで、霊性と理性はその職能

まの科学の立場から眺めると、まことに古いと言わねばなりません。学校で科学的にものを見る眼を開かれた若い人たちが、聖書のなかのその矛盾をまず意識するのは、無理のないことです。

それならば、幼い児たちは、それまでどのように暮して来たか、ものの理を考える能力が養われるまで、何を中心に生きているか、という問題になります。

それは、きわめて**素朴なすがたをもった霊性**だと、わたしは考えます。「お月さま」、「お星さま」という言葉が、幼い児たちが、神秘なものを、それ、うやまう気持を言い現わしていますが、同じ気持がいちばん自然にうまれるのは、母なる存在への依存と信頼です。そこには、理性というものがまったく存在しないと言っていいでしょう。幼稚といってはあたらず、純粋というべきです。キリストが「幼児のごとくならなければ天国へ入ることができない」といわれたのは、この本能的な自然のままの霊性のゆたかなすがたを指されたと思います。

南アフリカのある土人の間では「遠いところ」を言いあらわす言葉として、「だれかが『おっかあ、おれは迷子になった』と泣き叫ぶところ」というそうです。わたしたちなら、長い文章になりますが、人間と人間の関係をあらわす言葉が原始人の間では言葉の根源であり、それが一つの単語で表現されるのです。距離を言いあらわそうとして、人間関係、とくに母親から迷子であるという内容の言葉を用いることは、これこそ、人間の根源的な性質を語っています。これは興味深い事実で、母親は幼児にとって最初の信頼の対象であり、信頼という人間のなかの、いちばん貴い能力は、その幼年期に、理性が目覚めるより先に育てられるのです。これは個々の人間の発育の過程であるとともに、人類の発展の歴史でもありました。幼年期の母親への信頼がやがて、日曜学校の先生への信頼ともなり、聖書の語るところ、神の愛をすべて無条件にうけいれさせるのです。

けれども人は、**信頼の幸福**にばかり浸っていることが許されません。アダムとイヴの原罪が人にその運命を負わせたと聖書は言います。理性のめざめは、幼児が「なぜ」という質問を連発するころから始まるのでしょう。学校教育はその本能を次第にそだてていきますから、子供の心のなかには、理性が教える世界観が、だんだんしっかりと土台をつくっていく。理性と霊性がその職能を分化しきれず、いわんや、そのなかのいずれが、高いかをわきまえないときに、両者が別れ争うことになります。まず疑うことからはじまります。

「日曜学校の先生はウソを言っているのではないか？」

「お母さんは科学を知らないから、盲信しているのではないか？」

こうして、母親に対しては全幅の信頼を失い、日曜学校や教会はおつきあいか、苦痛の場となる。大切な人格形成の時期に、全幅の信頼をもつ対象なしに生活することは、その人の生涯に、暗い性となる結果を招きますから、大きな不幸だといわねばなりません。

この現象に拍車をかけるものは、学校の教育のみならず今日の世相であって、その第一にマスコミをあげましょう。いまは、児童生徒の教育の場が家庭から街頭にうつり、目まぐるしい、浅薄な知識の洪水にかれらは抗うことができません。

信頼を本能とする霊性は、人間の心の深いところにひそむもので、心の静かな、おちついた状態においてのみ、そのすがたをあらわします。浅薄な知識や、うわついて感情が表面に出ている環境のなかで、これをそだてることはむずかしいのです。

霊性と理性との相違はわかったとして、この分離を、ひとりの人間のなかで、どのように解釈するのが、原理的に正しいことでしょうか。その解答は聖書のなかにあります。聖

児童説教

八月のこよみ

八月の四つの日曜日は、宮きよめ、けんそん、信仰の目が開かれること、永遠の生命を得るための愛の実践、等、かなり具体的な問題が取り扱われているが、期節としては三位一体後の無祭期のつづきであるから、特に気をつけるようなものはない。

ただ一般にはあまり注意されていないが、教会暦の中では、八月六日の「主の変貌日」と、八月二四日の「使徒聖バルトロマイの日」が、特別の日として守られている。

主の変貌日というのは、マタイ一七・一―八にあるタボル山上の出来事で、これはイエスの生涯においては、極めて重要な意味を持っていた。春先きの顕現節の最後の日曜日を、「主の変貌日」として守ることもあるが、これはエピファニーと意味的に関連を持っているからであって、時期的には八月六日が正式である。

使徒聖バルトロマイの日というのは、一二使徒の一人である聖バルトロマイの記念日で、古くから祝われてきた祝日である。バルトロマイは、聖書の中では一二使徒の一人として、どの福音書にも名前は出ているが、あまり目立つ人ではなかったと見えて、特にこの人についての記事は見当らない。



八月六日

教会のために働こう

聖書　働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は同じである。　コリントI 一二・六

今年も甲子園で全国高校野球大会が開かれる頃となりました。野球は誰でも知っているように、捕手、投手、内野手、外野手等九人のチームです。外野に球が飛んで来ない事があっても、捕手投手だけで仕合をしているのではありません。教会も牧師先生はじめ何人もの先生や役員さんがそれぞれの役目をもっています。そして皆が心を合せて神様にお祈りをし計画をたてて教会のために益しているのです。つまり教会は聖霊のチーム・ワークであると聖書は教えています。

イエス様は「わたしの家は祈りの家である」とおっしゃいました。教会は神様のお家で、私たちがお礼拝をしたり、聖書のお話を学ぶ所です。皆さんは教会学校に来ると何となく心がひきしまる思いがしますね。それは神様の聖霊がここにおられるからです。けれども体だけでなく、心の中もきよめて頂くようお祈りしましょう。

また教会は神様のお家らしくとてもきれいにお掃除がしてあります。一体誰がお掃除をして下さるのでしょう。これも先生方です。

島根県松江の教会学校に森脇さんといふ二年生の女の子がいました「先生お掃除に来ました」と、毎週土曜日になると会堂掃除のお手伝いに来てくれました。私共は教会のためにしてくれるその心を大変喜んで居ましたが、イエス様は、もっともっと喜んで下さったに

をことにすること、上にのべた通りで、この性質と能力の範囲を、たがいに冒してはならないのです。理性をもって霊性によびかけても、その反対も無益です。そして人である限り、その霊性は、外側からの霊性の働きかけに反応する力をもっていることを信じます。霊性がそだてば、理性とどんな矛盾がおこっても矛盾を矛盾として、理性をしたがえて生きていくことができます。キリスト信仰をいだきながら大科学者として生きた人がすくなくない理由です。

ゆえに、第三の方法は、そしてこれがいちばん大切な道ですが、若い人たちの心におこった疑問に直接答えても、それは解決にならず、矛盾をそのままにして、小さいにせよ信頼の心を、失わさせないようにつとめることでしょう。

そのためには、教師であれ、母親であれ、**自ら真実な生き方を求める**ことが、残された唯一の道ではないでしょうか。人間である以上、年代を問わず、知識の有無にかかわらず宇宙につき、人生に関し、疑問や矛盾を感じないわけはありません。悟ってしまった人のように、何の疑問も苦しみもない信仰生活がもしあるとすれば、わたしはその信仰の真実さを疑います。

自ら迷い、疑い、そのなかで神を信じ、人を信ずる闘いこそ、人の真実な生き方で、その正直な現実だけが、若い人を助けるといえば言えるのです。その闘いの内容がそのまま若い人からわかってもらえることは、むずかしいが、実はその必要があるのではなくて、その態度が、言いかえれば、霊性のありのままの、正直な生きざまが、若い人たちの半信半疑を、半信半疑のまま救うのです。それは直接**「わかった」という解決を与えることではなく**、半信半疑のまま生きつづけるちからと勇気を与えるのです。

若い人たちのなやみを小さなことと考え、これを軽々に扱ってはならないと思います。それは霊性にとって深刻な問題をはらんでいます。人の霊性の尊厳を考えるとき、簡単に、口先きで、説明で、考えなおさせようなどと思うのは、冒瀆です。幼い霊といえども、知識の不足の問題ではなくて、信頼性を失う、すくなくも傷つけられるわけで、エデンの園の誘惑の再現でもありましょう。

知識の不足ならば理を語ることによって正しくすることができましょうが、霊のことである以上、霊以外にわきまえるものではなく、霊は言葉ではなく、服従そのものに呼吸し生きているのだと考えたい。若い霊は、幼いだけに、汚れを知らず、そのことに敏感であります。アフリカのジャングルのなかの無知な土人が、霊の問題に文明人よりも敏感なことと同じであります。

マスコミの氾濫は、大人たちをも、静かなおちついた生活から追い払おうとしています。大人たちは、自分のうちの霊性と理性の声に耳をかたむけず、聖書をすてたり、科学を尊重しなかったり、両者の矛盾をまったく別個のものとして扱って平然としている傾向が多いと思います。むしろ、若い人たちより、その霊性がゆがめられていないでしょうか。大人は若い人たちの霊の純粋さに、目を開くべきであります。

最後に、**人の霊性は直接神につながるもの**で、大人の誰も、実は神との間に立つことはできません。幼いもの、若い人たちの霊を神の手、キリストの導きにゆだぬべきことを忘れますまい。現実に、若い人たちの霊の歩みに、わたしたちの心をくもらせるものが、たくさんあるとしても、わたしたちが自らの神信頼を正しく深くするように、つとめる以外は、すべて神の導きの手を祈ります。それ以上に思いあがってはならず、また、祈りによってすべてが最善に導かれることを信じていきたいものです。

以上が、若い人たちの聖書と科学の矛盾にこたえる、わたしの答であります。

（日本キリスト者医科連盟会長）

上の置時計を指差しました。午後三時ごろなのに、その針は八時十分を差していました）巻くのを怠ったので役に立たない」牧師は続けて語りました。「きみもわたしも時計に似ている。きまった時に心のねじを巻き、神様からの力を貯えておかないと役に立たなくなるのです。」

少年は聖日に教会へ行くのを欠かさないようになりました。かれは、自分がこうまんであったことに気が付いたのでした。

山室　民子

―八月二〇日―

主イエスのみわざを伝える者

聖書　彼らは、ひとかたならず驚いて言った「このかたのなさった事は、何もかも、すばらしい。耳の聞えない者を聞えるようにしてやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」

マルコ七・三七

主イエスが、美しいガリラヤの海辺においでになった時、人々は耳もきこえず、口もきけないかわいそうな人を連れて来て「手を置いてやっていただきたい」と主イエスに願いました。

主は、その人を群集の中から、ひとりだけ、連れ出し、その両耳に指をさし入れ、それからつばきでその舌をうるおし、天を仰いでため息をつき、その人に向って「エパタ」（開けよ）といわれました。すると彼の耳がきこえるようになり、その舌のもつれもすぐ解けて、はっきりと話すようになりました。主イエスは、この事を誰にも言ってはならぬと人々に口どめなさいましたが、それを見た人々は、驚きの余り、主イエスのみわざを、そのまま、他の人々に言い伝えました。「この方のなさった事は、何もかも、すばらしい。耳の聞えない者を聞えるようにしてやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」と語ってあるいたのです。いつも、たくさんの人々が主イエスのまわりに集り、色々なお願いを致しました。主は、人々の大切な要求をかなえ給うために、その人に、もっとも適当な方法を用いなさいます。

此の時、主イエスのみもとに連れて来られた人は、主のみ声もみ言葉も聞くことが出来ず、主を讃美することもできない人でした。然し、主は、此の人の耳と舌とに触れ給うて、これをいやし、神さまの教えを学び、主を讃美することが出来るようになさいました。

人は、いくら肉体的に健康であっても、元来、神さまのみ言葉をきき、主と語り、主を讃美する事がむづかしい霊魂の持主です。心の耳や心の舌が病気になっていますから、そのままでは、なかなか、神さまのみ旨にかなうことができません。

主イエスが栄光の天のみくらを捨てて此の世にいらっしたのは、人類の霊魂の病気をなおすためでありました。そのため、主は、水と聖霊とによって潔められ、新たに生れて主イエス・キリストの肢につながれるため、聖洗式（バプテスマ）を備えたまうと共に堅信のために按手の式を示し、更に、真の健康な心の耳や心の舌を保つために聖餐式を定めたまい「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である」（ヨハネ六・五四）とおさとしなさっています。

福音書に記されている主イエスのみわざばかりでなく、二千年来、今日まで、主のみ体である教会を通して成されてきた驚くべき神さまのめぐみのみわざを、私共もまた、正しく見聞して、「お

違いありません。

一つみんなで働いたお話をしましょう。アメリカのある田舎の教会で祈禱会がありました。その夜一人の神学生が伝道に行くのでそのために祈ることになりました。祈禱の途中一人の女の子が「先生私に、言いわせて下さい」と立って、Tさんの伝道のために私は歌でお助けしたいと言いました。すると一人は「私はトランペットを吹いて助けます」と言いました。一人のお百姓さんは「私は歌も歌えないし、音楽もできないが幸い自動車がありますから、それでみんなをそこまで送って上げましょう」と。すると隅の方に座っていたおばあさんは「私は老人でお金をためる事が楽しみでしたが、神様におささげします。今これだけのお金があります。自動車のためにガソリンを買って下さい」とお金を差出しました。みんなで伝道に加わったのです。

お礼拝の司会や、分級のお話は先生方がして下さいますから、皆さんは自分が出来る事を考えましょう。①新しいお友達をつれてくること。②休んで居る教会学校の生徒をさそうこと、③献金をすること。④お掃除や、片付けのお手伝、まだまだありそうですね。自分達に出来る事を力をつくして教会のために働きましょう。神様もお喜び下さって私たちの教会学校をもっともっと立派にして下さるに違いありません。

——八月一三日——

自分を低くする者

聖書 おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。 ルカ一八・九—一四

これは、イエス様の譬話の一つです。

ふたりの人が宮で祈っていました。ひとりはパリサイ人で、自分の行ないが正しく、自分はりっぱな人であると言い、他の人々を軽べつしていました。もうひとりは取税人で、人から遠く離れて立ち目もあげられないほどに罪を恥じて、神様のゆるしを求めました。

神様は人と違って外に表われた行ないばかりを見ずに、心をごらんになる方です。わたしたちの行ないは、もちろん良くなければなりませんが、こうまんであってはなりません。まず心がけんそんでイエス様を信じ、人々にしんせつで、良い行ないができるのでなければなりません。パリサイ人の祈りは聞かれませんでしたが、心を低くした取税人の祈りは聞かれました。

たとえば、あなたのコップの水がよごれているとします。だれかが、きれいな水にかえてあげたいと思っても、あなたはその水がきれいだと言い張ってそれを捨てなければかえられません。パリサイ人のようにこうまんで、心がいっぱいになっている人は恵みをいただくことができません。しかし、この取税人のように、自分をかえりみて、きたないこと、悪いものは捨て、神様にお頼りする人はすくわれ、イエス様ににた清い、愛の心や力が与えられ、良い行ないが自然にできるようになります。

ある中学生の少年が、かれの牧師を訪ねて申しました。「先生、ぼくはおとなになったらどんな人になり、何をやるか考えています。もう、ぼくは毎週きまって教会に行く必要をみとめません」すると牧師は答えました。「きみはきみのことを考え、計画を樹てなさい。わたしは説教を考えたり、病人を見舞ったり、時計のぜんまいを巻いたり、忙しいのだから……」「時計のぜんまいを巻くなんて何でもないではありませんか？」と少年がいうと先生は言われました。「わたしはたいせつな仕事だと思う。家の廊下の柱時計は毎晩十時にぜんまいを巻くと調子がよい。こちらの時計は（と、棚の

礼拝説教



三位一体後第一〇主日（変容貌日）

主の宮

八月六日

主日の趣旨　祈りについて学ぶ主日である。主は、エルサレムの宮を「祈りの家たるべし」と言われた。われらもまた「活ける神の宮」（IIコリント六・一六）であるならば、祈りの器でなければならない。八月六日は、主の変容貌の記念日である。主がこの山に登り給うたのも「祈るため」であった。祈っておられる間に、み顔の様が変り、み衣がまばゆいほどに白く輝いたことは、まことに暗示が深い。

われわれも、もっと深い神との交りに入るべきではなかろうか。

主題　**御心にかなう祈り**

福音書　**ルカ**　一九・四一―四七
使徒書　**コリI**　一二・一―一一
旧　約　**エレミヤ**　七・八―一五

祈り　主よ、あわれみの耳を傾けて、しもべの祈りをききたまえ。又その願うところのものを得んがために、御心にかなう願いをなさしめたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説教

キリスト教は祈りの宗教であると言われる。しかし祈りを大切にするのはキリスト教に限ったことではないはずである。否、むしろいわゆる御祈禱が中心になっている宗教も少くない。

問題は「御祈禱」とキリスト教の「祈り」との相違点である。この点があいまいになってしまうと、キリスト教の祈りも「御祈禱」と、えらぶところがなくなってしまうであろう。

祈りについて、もっとも陥り易い誤りは、神の御声を聴くことを忘れて自己の願望を、祈願を訴えることに終始してしまうことであろう。

この場合は、神と人との関係が逆転して自分が主になり、神は従になるわけである。祈りは、神との霊交であると云われる。交りとは相互的なものでなければならない。にもかかわらず、それが一方交通になる傾向が極めて強いのである。

神と人との交りは、もちろん相互的なものでなければならないが、この交りの中核となるものは「神に聴く」ことでなければなら

し」をいやし給うた主イエスのみわざを宣べ伝えた人々のように、「このかたのなさった事は、何もかもすばらしい。耳の聞えない者を聞えるようにしてやり、口のきけない者をきけるようにしておやりになった」と、友達に語り伝えることのできる人になりましょう。

今井　正道

――八月二十七日――

そのとおり行いなさい

聖書　あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。　ルカ一〇・二八

夏休みも、もうお終い。この夏にはみんな泳ぎが出来るようになりましたか。なぜ人は泳ぎが出来るのでしょう。じっとしていれば沈んでしまいますが、足と手でうまく水をかけば、浮力が出て浮び、また前に進めるのですね。けれどもそうゆう事を知っていても、泳げるようになるには不充分です。水につかってバタバタやってみなければ泳げません。顔を水につけるのが恐ろしい人もいるだろうが、恐れず実際に苦労をしてやってみなければだめです。つまり人はどうすれば泳げるかという質問に、どんなに上手に答えられても、そのとおり実際に行わなければなりません。

ある時イエス様の前で、一人の律法学者が、神様の教えの全体を実に正しくまとめて答えました。二七節参照。本当に神様をあがめ愛し、また隣人を自分のように愛しなさいと。するとイエス様は云われたのです。二八節参照。そして有名な「よきサマリヤ人」の話しをされました。強盗に襲われた人が寂しい道端に苦しみながらうずくまっていると、立派な祭司とレビ人が次々通りかかったが、よけて通ったのですね。そして最後にやってきたサマリヤ人が、日頃ユダヤの人からよく思われていなかったのに、この人を手厚く介抱しました。この三人。誰が苦しんでいる人の友となり隣人となったのでしょうか。誰でも正しく答えられるはずです。そこでイエス様はおっしゃるのです。そうです。今正しい答えの出来た人に云われるのです。「あなたも行って同じようにしなさい！」

私達はサマリヤ人のように、ああゆう人には出会わないかもしれません。道端で倒れている人、それは酔払いかもしれません。巡査さんに云ってあげた方がいいかもしれません。けれども私達は小さな事からでいいから、正しい答えを行う努力をしてゆきましょう。

つとむ君はこうゆう事から始めたのです。模擬テストの日、隣の席はいつものまさる君。すぐひとの答案をのぞこうとするイヤな子です。それに大変な暴れん坊。そのまさる君が折れた鉛筆をいくらけずっても、すぐに芯がおれてしまうのです。学校へ来る途中で、鞄をなげつけたり、筆箱を乱暴に扱うからいけないのです。つとむ君はいつもは鉛筆を三本入れていますが、テストのある今日は、新しい四本の鉛筆を入れていました。そのきれいにけずれた一本をかしてあげたのです。暴れん坊は、イヤイヤちびた一本の鉛筆をかしてもらった事はあっても、こんなにしてもらったのは初めてでした。小さな事からでも、はじめてみよう。そうするとイエス様の愛の大きさも分ってくるのです。（聖句を訴える）。

船越　諭

〜〜〈表紙説明〉〜〜

使徒聖トマスのシンボル

使徒トマスは、表紙に見られるように、槍と大工の物差しとであらわされる。トマスはのちにインドに渡って、そこで自分の手で教会堂を建てたが、結局槍で突き殺されて殉教の死をとげたという伝説があるからである。記念日は七月二五日である。

主題　天の宝をうくる者

福音書　ルカ　一八・九—一四
使徒書　コリＩ　一五・一—一〇
旧　約　詩篇　一一三・一—九

祈り　あわれみを施すとき、ことに全能を現したもう神よ、願わくは豊かなる恵みをあたえて、信仰の馳せ場を走り、ついに主の約したまえる天の宝をうくることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

本日の福音書には、まことに巧みな譬が語られている。

一日、二人の男が偶然、時を同じうして宮にやって来た。二人とも祈るために宮に来たのであったが、まことに対照的な二人であった。一人はパリサイ人、一人は取税人であったと云うのである。

パリサイ人は至聖所に向って立ち「神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています」と言った。

彼は、自分では祈っているつもりであった。しかし、これが果して祈りというものであるだろうか。

宮に来てまず第一になすべきことは神を拝することでなければならない。パリサイ人は、顔は天に向けていたかも知れないが、眼は地上に注がれていた。しかも、同じ時に宮に来ていた取税人を侮蔑の眼で見下していたのである。これは何ということであろうか。

礼拝は、祈りは、まず神を仰ぐことから始められねばならない。

ある画家がキリストの像を描いた、出来上って友人に披露したが余り好評を得られなかった。するとその画家が言った。「この絵は跪いて見て貰たいたのだ」友人は画家の言う通りに、その絵の前にうやうやしく跪いてキリストの像を見上げた。

友人の眼は輝き、思わず「これは素晴しい」と叫んだ。

礼拝には、祈りには、まず跪いて神を仰ぐ態度がなければならない。神を仰がず、取税人を見下したパリサイ人の眼に映じたものは他人の欠点であった。そして他人と自分とを心の中で比較して見た結果、比較にならない程に、自分自身が優っていると云う結論に立ち到って彼は自己満足に陥ってしまった。

彼が宮に来たのは神を仰ぐためではなかったか、神の光のもとに自分自身の真相をいかんなく暴露していただくためではなかったか

たとえ人には知られなくとも神の御前にしおおせることがあろうはずはない。人の心の奥底に秘められたことも、神の御前には見通しである。さればこそ真実のさんげが起るのである。

パリサイ人がしたことは、人が神の前でなすべきことでなく、むしろ神が人間に対してなされて然るべきことであった。それは人を審くことであり、自分をほめることであった。

他人の欠点を指適したパリサイ人は自己の善行を指適して自己満足に耽溺したのである。

一方、取税人はどうであろうか。

彼は宮の内陣に入ることさえも出来なかった。恐る恐る遠く離れたところから至聖所に向って立っていたが眼を天に向けることもせず胸を打ちながら、ただ一言「神様、罪深いこのわたしをお許し下さい」と、それは短い、本当にただの一言（ひとこと）であったが口をついて出

ない。
だから「祈り」とは神の御心を動かして自分の願望を押し通そうと云うのではなく、愚かな、向う見ずな自己が打ち砕かれて、神の完き聖旨に従う者となるように祈ることこそ祈りの中心でなければならない。
我々は知恵も乏しく思慮も浅く、何を祈るべきか、何を与えられる事が、最も自分にとって幸せであるかと云うことさえも知り得ない愚かなものである。
もし我々が軽卒に祈る毎日の祈りが、そのまま直ちに聴かれたとしたら我々はどのような不幸に陥っているか推り難い。
私はかつてアメリカのある雑誌の誌上で感銘深い物語をよんだことがある。
ある冬の夜、貧しい老夫婦の家に一人の友人が訪ねて来た。この老夫婦には一人の息子があるが、今は都会のある工場で働いているのである。この友人は奇妙なものをもって来た。魔法の猿の片腕である。そしてこの片腕に願いごとをすると必ず実現するというのである。老夫婦は眼を輝やかせ、友人のとめるのもきかないで、無理矢理に一晩だけ、その魔法の腕を借りることになった。
友人は「この魔法の腕を所有して幸福になった人は未だ嘗てありませんでしたよ」と気味の悪い警告を残して去って行った。
老夫婦は相談の結果「三千ドルのお金が明朝与えられるように」と云う願いごとをして床についた。生涯を貧困のうちに過して来た老夫婦にとって最後の望みは、まとまったお金を手に入れることであった。
翌朝早く、けたたましいベルの音に眼を覚した老夫婦は、身づくろいもそこそこに階段をかけ降りて玄関のドアを開けると、礼服に威儀を正した紳士が立っていた。そして厳粛な面持ちで語り出した。
「まことにお気の毒にたえませんが昨晩、工場で残業中、事故があって御令息は殉職せられました。会社を代表して取りあえず御報告かたがた御悔みに伺いました。御遺族への弔慰金として金三千ドル、社長から預って参りました」
話はなおつづいているがこれ以上語る必要がない。
主イエスは弟子たちに「汝らは求むるところを知らない」と仰せられた、まことにその通りである。
祈りは生ける神との霊の交りである、そして祈禱において我らは先づ神のみ声を聴くことが第一であり、「主の御意の行われんことを」との祈りこそが我々の究極の祈りでなければならない。

三位一体後第一一主日

謙そんについて

八月一三日

主日の趣旨　主の備え給う天の宝を授けられんために、もっとも必要なものは謙虚な態度である。これは信仰の第一原理とも云われる。神の前における謙虚な態度は、われわれを罪の自覚に導くのである。そして罪の自覚こそ信仰への第一歩である。三位一体後の五つの主日は愛、次の五つの主日は神に対する我らの義務について学び、第一一第一二の二主日は神の恩恵について学ぶ主日であり、本主日は神の恩恵にあずかる者となるために必須の条件とも云うべき謙遜の態度について学ぶのである。

とはなかった。
　このような完全な五体を与えられた和は、この五体をもっと有効に、能率的に用いて神の栄光を顕わし、五体ぐるみの信仰と告白伝道に励まねばならないと、固く決意した次第である。
　ガリラヤの湖畔において、主は、耳がきこえず口のきけない人を癒しておやりになったことが、今日の福音書に記されている。人生に不幸がみちているのは、二千年前も今日も変りがない。主イエスはこの人の世の禍の前に「ため息」をつかれた。各地を遍歴された主イエスは到る所で悲惨な人生の事実に直面されていかに心を痛められたかが伺われる。
　主イエスは、この人の耳に指をさし入れ、また舌にさわり「エパタ」と詔うた時、奇跡が成就し、その耳が聞え、正しく物言うことが出来るようになったのである。
　我が国にも聾者の数は多い、盲人の人たちのように我々の目にはつかないが、盲人の数の約二倍であると云うことである。
　しかし、もっと多いのは神の御声に対する霊的な聾者である。主イエスは幾度か「聴く耳ある者は聴くべし」と仰せられた。又「耳に聞こえてもこれを悟らない」と嘆かれた。
　日本には既に一千万冊以上の聖書が行きわたっているはずである。しかし果して幾人の人が、聖書の中に神の御声をきいていることであろうか。
　我々は皆、正常に物言うことが出来ると考えている。だが「正しく物言う」とは何を意味するかを深く考えて見なければならない。
　神は万物創造に当って、人間を神の肖像として、神の呼びかけに応答するものとして創造(つく)られたのである。人間は神との呼応においてのみ人間であり得るのである。人間以外の動植物、其他は、創造者なる神を識ることも、従って、また神と交る事もなしに動植物であり其他のものであり得るけれども、人間のみは神との呼応が行われることにおいてのみ人間であり、この関係が失われた時、人間はもはや正しい意味における人間ではなくなるのである。
　神の御声が聞えず、聞いてなお悟らず、従わぬ者は、霊的な聾者であり、神の呼びかけに応答して「アバ父」と告白し得ぬ者は、霊的な唖者である。主イエスはこのような者の耳を聞き、さらに正しく物言わしむる為にこそ来り給うたのである。
　我らは今尚、聾唖者なのであろうか、もしそうであるとするならば主の癒しと救いを仰がねばならない。
　我らは既に癒され救われた者であるならば、黙しているはずはない。
　かの癒された聾唖者を見よ！
　「人々に口止めされたが、口止めをすればする程、かえって、ますます言いひろめた」ではないか（マルコ七・三六）

三位一体後第一三主日

愛の実行

八月二七日

主日の趣旨　本主日から三位一体節の第二期に入るわけである。第二期の主題はキリスト者の品性でありこの期間を通じて本主題について考究する。キリスト者の品性について第一に学ぶべきは愛

た真実の告白であった。

本当に聖なる神を仰いだ瞬間、罪深いわたくしたちが発し得ることばはこの一言につきるのではないであろうか。

ここから出発しない祈り、ここから出発しない信仰は神さまのみもとには届かないのではあるまいか。

主イエスは譬としてこの話を語られた。……しかしこれは単なる譬ではない。否、たとえどころではないのである。これは他人ごとではなく、正しくわたくしども一人一人への厳かなる警告なのである。

「神に義とされて自分の家に帰ったのはこの取税人であった」

神はこの取税人の謙虚さをめでて「天の宝」を授け給うのである。

人間は所詮、神の前には五十歩、百歩の罪人であるとするならば自己の罪を自覚して懺悔している者こそ最も神に近づいている人と言うべきであろう。

三位一体後第一二日主日

信仰の告白

八月二〇日

主日の趣旨　恩恵の主日である。神の恩恵は常に我らの願いと我らの祈りに先立って準備され、賦与されるのである。

我らは如何にしてこの恩恵に応うべきか、信仰の表明と恩寵の証しあるのみ。

主題　恩寵の証し

福音書　マルコ　七・三一―三七
使徒書　コリントII　三・四―一一
旧約　エステル　四・一三―一六

祈り　とこしえにいます全能の神よ、主は常に我らの祈りにさきだちて聞き、いさをなきしもべらの望むところよりも多く与えたもう。願わくは豊かなる恵みを注ぎ、罪を赦して良心の恐れを除き、あえて願い得ざる良きものを与えたまえ。御子イエス・キリストのいさをによりてこいねがい奉る。　アーメン

説教

人間は、自分の不幸には敏感であるが、他人の不幸に就ては案外に鈍感である。過日の東北地方の大火のようすについては、新聞、ラヂオ、テレビ等のあらゆる報道機関を通じて伝達されたが、その時にはそれ程までに実感を伴わなかった。その後、救援物資をお送りした先から、実状を記した礼状をいただいて初めて生々しい被害の実状に驚いた次第である。

私はもう一カ月半も前から眼を患っていまだに眼科医に通っている。一時視力が衰えた時は、心の中がジーンとして来るような一種の悲哀を感じたものである。一日暗い気持で眼科医から帰って来る途中、私は街頭で次々と数名の身体障害者に会ったのである。何れも見知らぬ人たちであったがこの人達に会ったことが決して偶然でないように思われてならなかった。

私はその人達の不遇に比べて、何と恵まれすぎていることだろうかと痛感せしめられ、この時程「勿体ない」と云う感を深くしたこ

聖書研究のための毎週の教案

第二期　聖書にもとづく教会生活

キリストの体の肢として、召された群がエクレシャであり、ペンテコステ以来のキリストの教会である。神が私たちに与えられた聖霊の学校とも言える教会生活が、まずみことばに基ずくものであることを深く学ぼう。

礼拝について

ヨハネ　四・二一—二六

㈠　誰しも、今日世界教会運動の中で、最大の問題は、礼拝論、特に礼典の執行に関してだという事は知っていると思う。しかし案外自己の属する教会の礼拝に就いてはその形式について従来のものをそのまま伝統とうけついで神学的反省を深くなしていないのではなかろうか。自分の経験を述べて恐縮だか、神学校を卒業して最初赴任した教会の礼拝に立った時一つの不安を感じた。それは、伝道者が味うあの不安とは別のものであった。特に礼典に関しては尚更であった。みよう見まねのあぶなっかしさ。礼拝の極めて自由な雰囲気。それは一つの定式への非難のようにも受け取られたし、又内に型即内容固定化への恐怖心をはらんでいるようにも覚えた。その次に礼拝が神の言への応答であるのに、全体が説教会のようだ。正しい会衆の応答は、主の祈、讃美歌のみで、そのため説教をなすものは、神の言を担いつつ一種云い知れない無の感覚を味うのである。また学生時代、或る日曜日、無教会に属する友人をさそって礼拝に出席した。聖餐式がまさに執行せられようとした際、彼がフト立って「これで私は失敬」とこう言って立ち去った。その時の私は、その批判的態度、いや礼典への非難がましい彼の態度に対し、何ら返答すべき礼拝への神学的根拠を有しておらず、自分の信仰生活の弁証力の稀薄さを味うだけという有様であった。この事以来、礼拝の神学的な理解の大切さに目を開き、更に学ばねばならぬと思った。それはさておき此の事は礼拝について次の事柄を私達に示していると思う。㈠事実、「礼拝学」は実践神学の領域として簡単に律せらるべきものではなく、神学的に深く検討さるべき事柄だという事。㈡従ってそれは私達キリスト者・人々の「救済」体験に関りを持ちつつ、正しい聖書への態度を私達に迫っているという事。㈢共同の行為である限り、この事が「全」教会の礼拝、即ち世界教会の道に連らなっているという事、㈣そして礼拝自体が、神の栄光の証しとなっていなければならぬという事。如何にこの事に私達が無関心でいた事か。この反省は同時に正しい礼拝への理解に私達をうながす。

㈡　①キリスト教の信仰は、それ自体、現在の活ける神の働きかけによって与えられ、決断をなさしめる所にその最大の特徴がある。この神の人間への働き、それが啓示に外ならぬ。即ちそれはキリストにおいて歴史的事件として与えられ、証言として聖書に記録せられ、現在への働きとして、教会の宣教の言としてある。この啓示に対しうながされてなす私達の神への応答、それが礼拝に外ならな

である。

もとより愛は神より出ずるものであり、我らは主イエス・キリストにおいてこの愛をうけ、この愛に感銘し、この愛に応答せんとのまごころが隣人愛となってあらわれるのである。

主題　神の愛に応えて

福音書　**ルカ**　一〇・二三―三七
使徒書　**ガラテヤ**　三・一五―二二
旧　約　**出エジプト**二三・一―一一

祈り　あわれみ深き、全能の神よ、御民の正しく仕えまつるはただ主の恵みによれり。願わくはこの世において忠実に主に仕えひたすら主の約束をのぞみ、ついに、御前にいたることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

一人のユダヤ人がエルサレムからエリコに通ずる寂しい街道にさしかかった。突然、強盗が現れて持物は云うに及ばず着物まではぎとられ半死半生のまますて去られた。悲憤、欠乏、孤独、悲哀、これにすぐるものはないであろう。

折よく通りかかった祭司、レビ人、共に神に仕える人たちであった、旅人にとっては、まことに幸運と言おうか、それこそ救いの神の使いであったはずである。しかし、事態は予想に反し、彼らは向う側を急いで通りすぎて行った。

ところが、そこへたまたま通りかかったのはサマリア人であった。このサマリア人は人種的な怨恨を超えて、まことに到れりつくせりの介抱をしたのであった。

ここで私たちは愛と云う問題について考えさせられる。

ここを通りすぎた祭司もレビ人も共に神に仕える身であるとすれば隣人を愛すべきことについては知りすぎる程知っていたに相違ない。ただ知っているだけでなく、事実彼らは同胞を愛し隣人を愛する精神をもっていたと思われる。

しかし彼らは行きずりの一人の見知らぬ人の苦しみを見すごしにしてしまったのである。

私たちは同胞愛とか人類愛と云うような事を、いとも簡単に言ってのけるのである。そしてこの精神に反対の者は恐らく全世界に唯一人としていないのではあるまいか。しかしいよいよ実行となると、身近かな唯一人の人でも純粋な心で徹底的に愛すると云う事は決してなまやさしい事ではないのである。

人間が神に背くようになって以来、人間は人を愛し得ない者となり果てたのである。何故なら愛とは神の心であり、神の本質であるからである。神を離れに生きるようになった人間は、当然の結果として自己中心に生きる者となったのである。肉親を愛する事や、身近かな者を愛する愛の多くは、自己中心につながる愛である。

では我々には愛することについて望みは失われたのであろうか。

リデル女史は英国の貴族の令嬢であったが日本に来て癩者のために生涯を献げられた。

われわれはこの事実を何と解釈すべきであろうか。奇跡なのであろうか。然り、確かに奇跡である。このような奇跡はどうして起るのであろうか。

神の愛をうけ、神の愛によって救われた者が、神への感謝感恩の真心をもって、神の愛し給う隣人を愛するに到るのである。

（立教女学院チャプレン　**大和田　功**）

する所がない」（カルヴァン綱要Ⅲ・第二十章の一）。神を信ずるものにとって祈りのない事は最も悲しき罪なのだという強い調子がそこにある。

祈りとはかくも俊厳なものなのだ。祈りとは神を目当とした活ける今在し給う神との対話である。人格的な交わりである。しかしそうと知りつつも、私達は生活の中で兎角すると祈りを忘れ勝ちとなる。弁解して曰く、生活の繁雑が一つの原因なのだと。それ故冷静に神と語れないという。つぶやき度い此の世の中で、自分の内なるものを圧しつぶしてしまうような外の力の刺戟にたじろいで、祈りを中止する。そうこうしている内に、心は内より外に、魂より外の生活にひかれてだんだん神の霊を忘れ去ってゆき勝ちとなる。結果は教会に足が遠のいたり、或は一人自分の信仰さえ守って居れば良いなどとつぶやいて、自分の信仰の瞳をつぶらしてしまう。祈りが私達の考え方の前に、死んでしまった。しかし主はこうした状況の私達をなおも許し給うて、なすにまかせ給わず、「御霊みづから言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのために、とりなして下さる」（ロマ・八・二六）。「切なるうめきをもって」とは一体、如何なる事柄なのか。それは「御霊が事実祈り、或は歎き給うのだというのではなく、私達が生れもっている所の概念の力では到底及ぶべくもない信頼、誓願、嘆息を私達に起させ給うのだ」（カルヴァン）という意味である。即ちイエス・キリストの執成しの祈りにより、それに励まされて、死せる祈りが、再び私達の内に活きて来るという事である。では此のキリストの執成しの祈りとは何か

㈠　ルカ六・一二以下を見ると、キリストは弟子達の中より十二人の使徒をお選びになるに際し、前夜一人山にゆきて祈り給うた。或は又同二二・三一・三二にはシモンに対し、彼の人間の弱さを許し、且つ受け容れ給うて、その信仰の失せぬようにと祈っておられる。同二二・四四には誘惑に陥ち入り易き弟子達のために祈り、二三・三四には十字架上の苦しみの中にも、「父よ、彼らを許して下さい。彼らは何をしているのかわからずにいるのです」と父なる神に懇願し給う。十字架においては、人間の主への無関心と、偽善的な冷酷さ、不貞実、傲慢というものが深刻に露呈された瞬間であるが、それでもイエスは、なおこの人間の罪のために切に祈り給う。又ヨハネ・十七章九以下には、最後の晩餐の後のいわゆる訣別の祈りが誌されている。その中でイエスは(1)世にあって悪に誘われない為に、(2)真理によって聖別せられる事を、(3)イエスを中心に全てが一つとならん為に、この弟子たちの為に祈って居られる。イエスの祈りとは、即ち、サタンに試みられ易き、世と闘って心が挫け勝ちな彼らへの、更に彼らが進んで神の国と神の義とを求めん為になされたものに外ならぬ。それは、イエスの日毎の十字架の祈りである。弟子を片時も忘れ給わず祈る。従って弟子達の生活は、此の主の切なる祈りに導かれ支えられ且つ活かされていった。この主の「執成しの祈り」を無視しては彼らの訓練も、聖化も存し得ぬ。「霊で祈ると共に知性で祈ろう」（Ⅱコリ・一四・一五）とは、まさにこの生ける「イエスの執成しの祈り」を思いまた励まされて祈る事を意味するのである。この主イエスを思う時私達は祈らざるを得ない。では祈りによって私達の信仰は如何に養われるのであるか。

㈢　(1)それは私達の心が、神を求め愛し礼拝し、且つ真剣にその願いを求める事により、如何なる時にあっても希望の錨として神のもとに帰り来る事を与えられる。(2)神を立証する事を恥じと思うような悪しき思いを私達の心より取り除き、神に対して常に全てのものを傾ける信頼の心が養われる。(3)神の愛と恵みを真の感謝をもって、且つ感激すらを以て受ける事を祈りの中に学び得る。(4)神への

い。礼拝の拒否は、従って、神の此の啓示の拒否に外ならぬ。

②「神は霊であるから、礼拝する者も霊とまことをもって礼拝すべきである」(ヨハネ四・二四)。祭司的礼拝は「習慣であり、父祖の言い伝えであって、そこには意志の働きはなく、真実の理解の上に存しない」(シュラッター)。従ってそれは応答にはならず、祭司による人々の応答の拒否が生れ、聖霊の働きを唯に虚空を走らしめる結果となる。それは「助け主」「真理の御霊」によって打ち建てられた教会の否定である。

③教会は聖霊の共同体の体験にその源を持つ(五月号三週を参照)。従って礼拝は孤立した個人の行為ではなく、教会全体の行為だという事である。即ちそこには交わりへの参与と、神の栄光への責任を与える力が存する。今日の個人主義の過度な動きは、教会の中にも滲透して来て、勢い、技師をして集会技術者、講演者に走らしめている。それは教会の独立の美名にかくれる分散で、教会のエクレシャの没却である。ひいてはその故に教会はその普遍性を失い、キリスト者には大いなる神の世への和解を忘れさせる。同じ日曜に、全世界のキリスト者が、共に同一の主を同一の信仰を以て礼拝している事を思い見給え!! 私達の個人の意識を越えた神のこの共同をひきおこしめる業を思わずには居られぬはずである。「神の選び給いし者達は全てキリストに結合し、一つの首による故に、謂わば一つの体に連なり、同一の体の肢として、相互に一つに関連し合い、同じ神の霊によって相共に一つの信仰、愛、希望に生きて一つとなり、唯に永遠の生命の同一の嗣業にのみでなく、一つの神とキリストにあづかることにもまた召されるのである」(カルヴァン、綱要Ⅳ一・二)。

④「礼拝とは教会がキリストのからだとしてこの世に存在し、そのわざと証しをなすために、唯一の適当な準備を行なうものである」(アバ「礼拝」二一〇頁)。礼拝は従って、神在し給う事を、此の世に宣言する唯一の証しの場であり、従って礼拝への参与は、個々一人一人に活ける主の証しが迫られている事を又自覚せしめる業に外ならぬ。まさに礼拝こそ、現在の神の聖霊の働きたる宣教の業以外の何ものでもない。一体このような意味をどれほど私達は学び且つ信じ、味わって来ただろうか。教会は修養会の期だ。左記をぜひ読まれる事によって更に深い「礼拝」への理解をもってもらい度いと思う。カルヴァン「要綱」Ⅳ第一章、第十四章。山木康「礼拝学概論」新教、レイモンド・アバ(滝沢陽一訳)「礼拝」。

祈りについて

ルカ 一一・一―一五

㈠「人間というものは何と一切の善に欠け、空虚であり救いの全ゆる助けというものを欠いている事か。しかし一度此の窮乏の中にあって本当の救いを求めるならば、自分を脱却して此を自分の外に獲得しなければならない。もしそう願うなら主は自発的に且つ寛容に御自身をキリストのうちに表示し給うて、彼の内に私達の悲惨の代りに一切の福祉を、私達の窮乏の代りに豊かさを提供し給う。そして私達に天の宴を開き示し給う。この神の恩恵に対して私達は何を応え奉る事が出来るだろう。それこそ『祈り』という態度なのだ。もしも神を全ゆる善の主であり、且つ恩恵を与え給う御方であって御自身に私達を招き給うという事を知りながら、しかも彼に一向に近づこうとはせず、又懇願もしないのは、あたかも誰か宝を指示されながら地上に埋没されたまま遺棄して置くのと等しく何ら益

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」（ロマ一二・一五）痛みの心であろう。シュヴァイツァーを評し「他人の苦しみや幸せを自分のものと感じることの意識」が人格の基本になっていてこの精神こそが現代で最も必要な道徳的な光彩であるといった、ノーマン・カズンズの言葉は唯に此の世の人々への警告に止る事なく私達クリスト者への厳しい反省をうながす言葉であろう。それはキリストに仕える事は同時に他者に仕える事だという意味である。如何なる形に於てそれをなすか。それが私達に課せられた神の使命、即ち恩恵の賜物の探求に外ならぬ。

㈡　確かに私達の祖国に於ても教会のある所、福音の説かれる所、必ず何らかの形でこの意味での奉仕がなされて来た。教育、医療、飢えと貧困への救済、悲惨への慰め。盲学校、聾唖学校の開設。特に日本の初代教会の宣教師と共なるこれらの業は、財力に於ても、教会訓練に於ても比較にならぬ程弱い教会の力でなされた事は充分覚えられてよい。然しそれも先進国としての合衆国教会の先駆性によったのだといえば過言であろうが、次第に社会主義的に移りゆく時代の中で、社会保障の発達にともない、それらの業は、教会より離れて行ってしまった。そして教会は新な奉仕の賜物を探求することを忘れ、徒に自己保存的になってしまった。他に生きる道を失った教会は最早教会ではあり得ない（ボンヘッファー）。三つの教会の証しの道としてケリグマ（宣教）とディアコニア（奉仕）とは、かくして分化する事により、コイノニア（交り）の生命すらも失ってしまっているのではあるまいか。

　では一体、具体的に奉仕に生きる道とは何であろうか。教会は神の国の民の雛型である。それは世界全体の民への責任をうながす。それは教会の社会的関心として、人間をして神の子たらしめる権威又権利の確立、即ち、社会的正義への関心事に連らなければならぬ。それは(i)不必要な困窮へ犠牲となって悩んでいる人々に、友となり共に生きる者である事を証しする事により、彼らの人間性を回復せしめる事、(ii)階級闘争の最中にある労働者階級に、社会的正義の担手としての共闘の道を開きつつ（特に今日のそれは新なヒューマニズム、人間回復の闘いなのだが）堕し易き、権力を得る事によって起る人間の抑圧への道を防ぐ事に、つよい働きをなす事、(iii)同時に、教会そのものが、その内なる力を常に供給し得る源となってゆかねばならぬ。それは新たな御言への探索、聴従を意味するのである。ロマ一二の意味する所を更に深く学ばねばならぬ。「キリスト者は、新しいアイオーンのしるし、キリストにある一員たることのしるしをおびる心をもって、神に奉仕しなければならない。このアイオーンのただ中において、キリスト者は『曲った邪悪な時代のただ中にあって傷のない』（ピリピ二・一五）神の子として新しいアイオーンの生活をいとなまなければならない。」（ニグレン、ロマ書講解）。

交わりについて

I　ヨハネ　一・一―四

㈠　標題の誌し方はその内容を規定する。それ故私は「交わりについて」という言葉が気になって仕方がない。それは「交わり」の中から生れでて来る姿勢ではなく、何かそれが少なからず失われているという反省の中から生れて来ているようであるから。そういえば今日の教会にあっては真の交わりたる礼拝よりも、友情や仕事や組合や学問上の事柄が大切で、それが欠席の正当な理由になりかねないばかりか、更に又礼拝厳守をのべると、ものわかりの悪い人物の

懇願が主の思いにかなった場合、必ず聞きとげられ、又異った仕方で応え給う事を知る事により、更に深き神の愛に己が瞳が向けられる。(5)「慣用と経験とが、彼の摂理を我々の心に我々の弱さの量に準じて確証し、斯くて我々をして、彼が唯に決して我々を見棄てずして、必要の時毎に彼はあらわに呼ばるる為に彼に近づく道を自ら進んで拓くことを約束し給うのみでなく、即時の救助にてなさけをかけ給うことを識らしめられる」(カルヴァン)。祈りによって与えられる信仰の糧の何と多き事よ。それは唯神と対立する事によってのみ与えられ、反省される糧なのである。

奉仕について

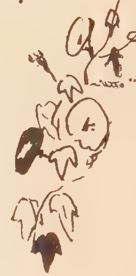
ロマ　一二・一―二一

(一)　何と自己中心的な危険性を担っている今日の教会である事か。唯にそれは異教社会の少数者としてキリスト者の群が存在するという理由によるのみではあるまい。筆者は自分の牧する教会の信徒が、入信の際綴った「信仰告白文」(特に戦後のもの)の中に現われる彼らの信仰と、現在の彼らの姿との相異を、教会に残る又離れてしまったという関係なく、その信仰の成長という面で考察してみた。入信の動機はそれが信仰に関る限り、個人的である。確かに切実な神との闘いをそこで経験している。しかし成長して行ったであろうという前提で、文化との素朴な問題を提出すると、実際行動では彼らに明瞭に二つの態度が生れて来る事にきづくのである。

　第一にそれは教会の中にとじこもって信仰の純粋性を保持しようとして、その信仰の要請する文化・社会との緊張関係より遠ざかり、更にそれを求めようとしない、むしろ遠ざかろうという傾向。従って一人のキリスト者として、此の世に対する勇気も力も、所詮そこには生れて来ない。あまつさえ、文化との関係を、俗なもの、穢らわしき業とさえ思いこむ。第二は、勇敢に此の世の中にあろうとする。然し自己の背景になっている教会の経済的みじめさ(それは自分達信徒の責任なのだが)と少数者がある事の故に、又、まさに周囲の社会の異質性の故に、いつしか社会の中に埋没して、意識の中で、自分のキリスト者である事を絶叫するのみで、その内、それもうすれ、自分の信仰は唯単なる過去の形骸となり終ってしまう。どちらも大きい誤りを犯している。だがこの動きがいつわらざる地方教会の姿だ。牧師はこの二種類の考え方の中で、時に自分の宙に浮く伝道の故に、胸を痛める。そして又経済的貧困と、信仰の貧困の唯中で、唯単なる教会運営の労働者になり下ってしまうのである。

(二)　こういった教会の現実の動きの中に、今日の教会が、実は課せられているいくつかの問題が、既に顔を出しているのに気附かれるであろう。それは教会がキリストにありつつ、此の世にあるという二重性が要求する問題である。キリスト者は「信仰による義人は生きる」ことによって、此の世にありつつ、新な変化の生が生まれて来なければならない。これが福音の力によって伴らされるもの、教会の生命に外ならぬ。それは神によって与えられた「定まった任務」を負う生である。「この任務において、からだと肢体とは神につかえるべきである」この義人の供え物とは「神に喜ばれる、生きた聖なるもの、すなわち神への真実な奉仕である」(ニグレン)。それが此の世にあっておこる。それはキリストの歩み給うた道を歩む事だ。教会はキリストの苦難を負い、キリストの死に合わされる限り、此の死を廻避する事は、その生を放棄する事に外ならぬ。教会が此の苦難を負う事は、キリストの死を負う事であり、神なき此の世が、その事によって担う死を負う事であらねばならぬ。それは

信徒学級



第二期　この世のただ中にある教会

キリストによる交わり

Iヨハネ　一 一—一〇

「交わり」という言葉は、いろいろの意味に用いられる。よい意味の場合もあり、そうでない場合も多い。なぜそのように、いろあいがかわるかといえば、「交わり」にはいつでも、但し書きがつけられるからである。「朱に交われば」とか、「悪い交わりは、良いならわしをそこなう」とかいわれるとき、交わりの悪魔的な面が、まえに押しだされる。非生産的な交わりである。

　これに反して、イエス・キリストとの交わりは、わたしたちを、生命にむすびつけるので、いつも、生気にあふれている。言葉をかえていえば、イエス・キリストとの交わりをもつ者は、教会の「からだ」であるキリストにつらなる「えだ」である。キリストと信仰者との関係を、「からだ」と「えだ」という言葉で描写するとき、この両者のあいだに、すこしのスキマもなく、かたくむすびついている状況を示す。これは、「信仰者」の場合であって、信仰者ということが条件になっているのである。したがって、信仰者でない場合すなわち、不信仰者の場合は、交わりの状態でなく、その反対の神との「破れ」の状態があらわれる。

　この世というとき、「破れ」の状態にある世を指しているので、この世のただ中にある教会といえば、神との「破れ」の状態のただ中にある教会ということになる。「破れ」のなかに「破れないもの」が、立っているのである。

　この世は、破れの世、すなわち、罪の世ではあるが、神と無関係の世ではない。この世は、神に対して無関係であろうとしても、神は、この世をはなちやりたまわない。神は、この世のうえにあるお方であり、教会の主であるキリストは、この世の主でもありたもうのである。

　教会を定義して、聖徒の交わりとか、キリストを信じる者の交わりとかいわれる。この交わりこそ、「キリストの創造の力」によって生み出された交わりで、最も生産的なものである。というのは、キリストの創造の力は、神との関係において全く絶望的な破れのなかにいた者を、そのただ中から抜き出して、神との交わりに入らせたからである。神との関係において、最も非生産的な状態から、最も生産的な状態に転換させる力は、キリストにある創造の力より外にはない。「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」とコリント人への第二の手紙五・一七にある通りである。

　イエスは、ヤコブの井戸のそばで、サマリヤの女にいわれた。ヤコブの井戸の水を飲む者は、「だれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでもかわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の

ようにさえ思われている。これが交わりの現状である。第二に、その原因はもっと深い所にあるのだが（奉仕を失った教会の当然の姿かも知れないが）交わりそのものが観念化して、私達の生活との結合点のない所にこのような考え方の生れる理由もあるのだろう。

さて交わりとは聖書ではコイノーニアと呼ばれている。それは信徒同志の人間的親しみ、交際から区別して、むしろその基盤としての「父ならびに御子イエス・キリストとの交わり」（Ⅰヨハネ一・三）に支えられ、それによって在る事を可能ならしめられた交わりを指している。筆者の牧する教会の信仰四五年にもなる老婦人が、証しして、「私共の此の世の交際は、はかないものだ。どれ丈の会や組織や集いに自分は出席して来たかわからないが、趣味・意見・憎しみ・離職そういった事で一つとして永遠の交わりは存在しなかった。それに反し教会の交わりは、死後まで約束された、破れる事のない保証を帯びた交わりなのだ。どうしてこれから離れ得よう」といった言葉は、いつまでも忘れる事が出来ない。そこには聖霊に結びつき泉となる永遠の生命が味わえる。一体どれだけの信徒が、この実感を内に味っている事だろう。

㈢　行伝はこの交わりの姿を「そして一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき祈りをしていた」（二・四二）「信者たちはみな一緒にいて、いっさいの物を共有し」（同・四四）たと誌している（このことについては五月号三九頁で既に述べた）。これは唯単なる、初代教会の外形的特有現象とのみ解する事は許されまい。むしろ、コイノーニアの具体的表現、否コイノーニアそのものと、見なされているように思うのである。即ち資産の共有という事。これはすぐ日々の配給問題で一頓坐してしまった。しかし「パンをさき、食事を共にする」アガペー（愛餐）は、尚礼典の上で、発展的に聖餐式となる事によって、当初の形は失われてしまったが、そこには実質的なコイノーニアの与える「よろこびとまごころ」とは生々として伝えられていった。ここで「まごころ」という語は「寛容な心」とも訳される（ブルース・行伝九一頁）から、そこには文字通りアガペーの喜びが満ちあふれていたのである。あらゆる労働より、又現実の束縛より解放され、それ一つの信仰、一つの御霊、一つの主（エペソ四）の交わりにあづかる事は大いなる喜びであると同時に、此の寛容そのものが生きなければならぬ。事実、この愛餐は食事に関る故に、多少、又遅く礼拝に出席するためになくなっている場合も少なからず、現実的な配慮が、それだけ必要とせられたのである（Ⅰコリ一一）。

コイノーニアとは、此のように、常に食事、ものの分ち合いと関連を有ちつつ、その全てが、神に献げられるべき事を要求しているのである。されば主イエスは主の祈りによってこのコイノーニアの深い意義を祈りによって支えられ、学び、且つ自らのものとらすべき事を教える。神は人間抜きにして存在しようとし給わず、人間の求めを欲し、神の御業に参与する事を求め給う。この事を自分に生きたものとしてあらしめるために「われらの交わりの中で、日ごとの食物を、罪過の赦しを、試みからの保護を求めるようにすめられるのである」（バルト）。主への交わりなくして、私達の交わりは存在しないように、又私達が自分達の交わりへの配慮、愛を抱く事なしに神との交わりは又存し得ない事を示しているのである。私達は前者の主張が強すぎる為に、この求めの祈りの少なさが起ってしまった。そして後者の勝手な解釈は、主への交わりを忘れさせた。愛が、交わりが、共に「もの」に関っていることを、そこに「奉仕」の道が存在している事を、力強く自分達の中に生かしたい。

（宮崎教会牧師　**桜井　一**）

公同礼拝における交わり

礼拝をおこなうことができる者は、神を信じる者だけである。神と神を信じる者とがあって、はじめて公同礼拝がなりたつ。この公同礼拝において、神との交わりの現実性が、もっとも、濃厚にあらわれる。公同礼拝が、本格的に、守られる限り、教会は、いつでもそのあるべき本来の姿をもちつづけていくのである。激変せる社会にあって、先頭をきっているのであり、どれほど、社会が、新しくなることがあっても、いつも新鮮さをたもつ教会の新しさにを追い越すことはできないのである。なぜなら、公同礼拝は、本格的に守られるとき、三一の神は、全面的に、礼拝者と出会いたもうからである。ただし三一の神は、礼拝者に、霊とまこととをもって礼拝することをもとめておられる。神との交わりをもつ者が、全体として神を礼拝するということは、地上における最もおどろくべき出来事である。

この公同礼拝が、この世のただ中でおこなわれるということは、人間の現実でなくて、神の現実といわなければならない。その現実は、神のみことばの現実であり、また、典礼の現実である。三一の神の現実は、まぼろしでも、空想でもない。ボンヘッファーは、この神をつぎのようにいう。「三位一体の神……父にして創造主であられる神、われらのために墓と地獄とをほろぼして勝利者としてわれらのあいだにおりたもうみ子にして救い主なる神、朝まだ早い時にわれらの心のかがやいた光として神のみことばを、われらにあたえ、くらやみと罪とをことごとくおいはらい、正しく祈ることをおしえてくださる聖霊なる神……」と。

三一の神のイニシェティヴによって礼拝は、生じ、存在する。人間の側からいえば、神のイニシェティヴに対する応答が、礼拝の要素となっているが、それさえも、神との対等の位置においてではなく、イニシェティヴをとる神のなかにまきこまれ、圧倒せられ、くだかれ、とかされて、「新しい人」とせられた存在者として応答するのである。三一の神が、人間をとらえて、これを、礼拝するにふさわしい者に造りかえたもう仕方は、人間の思いをこえたものであるから、決して人間の注文通りには、おこなわれないのである。

三位一体の神は、人間を生かすために、殺し、高めるために、低くし、富ませるために貧しいものにせられる。ヨハネによる福音書五一九以下には、「父が死人を起して命をお与えになるように、子もまた、そのこころにかなう人々に命を与える」と記されているが、これは、死人のよみがえりを見て、わたしたちが「不思議に思うためである」というのである。コールブリッゲは、その説教のなかでこのことを述べて次のようにいう。「わたしが死んで、わたしの頭骸骨を見つける人があれば、この頭骸骨は、その人になおも証しようとするだろう。『わたしは、目がない。けれどわたしはキリストを見る。わたしは頭脳ももたないし、理解もない。けれど、わたしは、キリストを理解する。わたしは、口唇がない。けれどわたしはキリストに口づけする。わたしは舌がない。けれど、キリストのみ名をよびもとめるあなたがたとともにキリストをほめたたえる。わたしは、かたい頭骸骨である。しかも、わたしは、キリストの愛に全くとかされて、やわらかにされている。わたしは、そとの墓場によこたわっている。しかしわたしはパラダイスのなかにいる。苦しみは、みな、わすれられている。わたしに対するキリストの大きな愛が、このことをしたのである。というのは、キリストは、わたしのために十字架を負うてゴルゴタに行かれたからであ

命に至る水が、わきあがるであろう」と。ここに、二つのものが、比較されている。この世につけるものと、イエスのうちにあるものとである。一方は、いずれは、消えてなくなる運命をもち、イエスのものは、永遠的であるばかりでなく、きわめて生産的でもある。

「交わり」のうえに但し書きをつけるとそのいろあいが、変ると、前にいったのであるが、大きくわけて、「この世」の「交わり」と「キリストにおける」「交わり」とすることができよう。この世の交わりがどれほど、きよく、高く、美しく見えるにしても、ヤコブの井戸の水と同じ運命をもっている。このようにいえば、ある者は、大きな不満を感じるにちがいない。この点について一つの例をあげて見よう。数年前に米国でもよおされた国際的な教会の会議のディスカッションの時間に、人間のいとなむことは、結局は、消えゆくものであるが、その原因は、人間が神からはなれていること、つまり、人間は罪人であることにあるという教えに対して、共産圏から来た神学者は、「従来、キリスト教会は、あまりに、人間のいとなみを過少評価してきた」といって不満をのべた。これは、「罪」の考え方の差異によるもので、共産圏の神学者は、キリスト教でいう「罪」の意味をはっきりつかんでいなかったのではないかと思う。

勘当ということは、親と子が考えられて、はじめて成立し、離婚は、夫と妻とが考えられなければ成立しないし、「罪」とは、神と人間がなければ、成りたたない。「罪」は、神と人間との間の分離状態、つまり「破れ」を表現する語であるからである。人間のいとなみを相対的に考えれば、ヤコブの井戸の水のように、よいものがいくらもある。それはそれとして価値があろう。しかし、これが、神との関係において見られるとき、それは、結局、「破れたザル」である。

そこで、神との関係において、問題が考えられるなら、この「破れ」が、いやされ、その状態が、とりのぞかれなければならない。この点に、聖書のメッセージは、中心をおいているのである。すなわち、この「破れ」をいやすお方は、キリストであり、キリスト以外には、誰もなく何もないというのである。

これで、キリストにおける交わりの優秀性が、決定的になったのである。だから、この世のものが、どのように、変化していってもそれに目をうばわれることは、必要ではないどころか、無用である。なぜなら、そうすることは、キリストにある交わりの敗北だからである。人間の社会のテンポの早い回転を見て、「激変する社会」という。それは、社会状勢の認識として必要である。「だから、キリストにある交わりとしての教会は、この激変する社会のテンポに歩調を合わせなければならない」というのであれば、教会は、すこし冷静に考えて見なければならない。「明治時代のキリスト教は、社会の先頭を切って、教育に、福祉事業に貢献したが、いまは、教会は、社会の変遷のあとを追っている」といった言葉をきく。そして教会は、そのことをすこしも不思議に思わないのである。これは、キリストにおける交わりとしての教会の自信喪失というよりも、むしろ、使命感の喪失であり、教会の失格といわなければならない。しかし、そうあってはならない。もしそうであれば、石が叫ぶであろう。なぜなら教会という名の人間の集団は、キリストにおける交わりとしての教会ではなかった。

の歌にあわせてうたう。それは、世界の創造のときの「明けの星と神の子たちの讃歌と歓声」である。……それは天上の交わりの新しい歌である」とボンヘッファーもいうように、新しい創造というおどろくべき出来事が、「わたし」のうえにおこるとき、いままで、歌ったこともないような、新しい歌を、キリストにおける交わりのなかで歌うことができるのである。

密室の祈りにおける交わり

エペソ　六一八―二〇

ルターは、一方「われわれは、みな死をもとめられている。たれも、他にかわって死にはしない。かえってめいめいが、自身で自分のために死とたたかう。……そのとき、わたしはあなたのそばにいないし、あなたはわたしのそばにいない」といい、他方において、「わたしが死なければならないなら、わたしは死ぬときひとりではない。わたしがくるしめば、彼ら（教会）が、わたしといっしょにくるしむ」という。ひとりでいることと、交わりのなかにいること、この二つは、相いれないもののように思われる。しかし、この二つはキリストである。イエスは、弟子たちとはなれ、群衆をさけて、ひとり静かに祈りの時をもたれた。またあるときは、弟子たちをはじめ、罪人たちを集めて、交わりの時をもたれた。キリストにおいて、この二つは、有機的なつながりをもっている。わたしたちにおいては、ひとりでいることといえば、孤独を愛する者ぐらいに考え一切の他者との交わりを好まない。他方、交わりといえば、ひとりでいることができなくて、さみしさにたえかねて、交わりをもとめる。それは、自己喪失者のきまぐれであって、孤独を愛する自己保存と大差はない。なぜといえば、交わりのなかに、自分を忘れようとする者は、人為的に、交わりのなかに自己を喪失するのであるし、孤独のなかで自己を保存する者は、保存しようと努力することによって、他者との関係を喪失し、その関係を喪失することによって、自己保存の必要のない真空帯に身をおくことになる。真空帯のなかの「自己」は「わたし」といって自己を指さす存在ではなくなる。したがって、「自己」は喪失されたも同然である。不思議の国のアリスの中に、猫がでてきて、ニヤッと笑った顔だけが、空中に浮んでいて、猫そのものはいないといったところがあったと思うが真空帯のなかの「自己」はこのようなもので、それは漫画である。

「交わりのなかにいることにおいてのみ、われわれはひとりでいることができ、ひとりでいる者だけが、交わりのなかに生きていくことができる。交わりのなかにおいてのみ、われわれは、ひとりでいることを正しくまなび、ひとりでいることにおいて交わりのなかにいることを正しくまなぶのである。一方が他にさきだつというのではなくて、二つは同時にすなわち、イエス・キリストの召しとともに、はじまるのである」（ボンヘッファー著、岸訳八二頁）。

ルターは、キリスト者に二つのことが必要であるという。それはみことばの瞑想、祈り、そして試練をうけることである。みことばをきくということは、決してたやすいことではない。なぜなら、わたしたちは、神のことばをうけいれない性癖をもっているからである。たとえば山上のイエスの教えにしても、「われわれの標準とちがうんだ」といってすててしまう。きこうとすることは、神のみことばに圧倒せられて、それに身をまかせる決断をすることである。これは決してやすやすと出来ることではない。これが出来るのは、わたしたちの力ではなくて、聖霊のはたらきというほかはない。

祈りは、自分のための祈りとともに、とりなしの祈りがある。し

る」キリストのなかで奇跡が、おこる。死人のよみがえりが、現実となる。

公同礼拝において礼拝者は、同一線上に立つが、それは、「キリストにある罪人」という点においてである。このような者として、信仰者は、聖書に接し、さんびし、祈るのである。「キリストにある」とはいえ、罪人として自分を見ている信仰者は、甘えた気もちをもって礼拝に参与しているのではない。礼拝に参与する者には、いつも信仰の決断がなければならない。

聖書を拝読するときも、礼拝に参与しているからといって神に甘えてはならない。聖書は、いわば、父をはなれた者に対する父からの手紙であり、その内容は、ゆるしである。礼拝者は、「ゆるし」の言葉をきいており、その「ゆるし」のなかで、神にむかう決断をするのである。神のイニシァティヴに対して応答をいつもするのである。さらに、聖書の内容をいえば、それは、律法と福音とからなっている。律法は、人間としてなにをしなければならないかをつげ、福音は、神が、人間のためになにをしてくださったかをつげる。説教においては、この二つがいつも説かれなければならない。律法は、人間になにをしなければならないかを知らせるが、神からはなれた人間は、これを自分のために利用して自我中心的態度を強化する。これはパウロのいうところを見ればよくわかる。説教においては、律法を説くことによって人間の無力を知らせ、福音にかくれ家を見つけるようにするのである。福音において「ゆるし」が、神によって備えられていることを知らされる。礼拝の参与者は、信仰の決断をするおりをもつのである。

礼拝において「祈り」は、重要な位置をもつのであるが、わたしたちは、「祈り」の本質について知るところが、まことにすくない。この点についてボンヘッファーの「交わりの生活」のなかで、詩篇についての解説の項で教えられるところが多い。わたしたちの祈りは、キリストの祈りからはなれた祈りではなく、キリストの祈りのなかでこそ、祈ることができるというのである。詩篇のなかには、罪なき者だけが祈ることのできる祈りもある。また復讐の詩篇もあるのでともすれば、これをどう解釈してよいかまどうのである。そのときキリストをここにもってくると、「神の復讐にうちのめされ、そして他に類もないように敵をゆるすことができたキリスト」が理解され、「ご自分の敵が解放せられるために復讐をご自身で受けられたキリスト」の姿をはっきり見ることができる。詩篇の祈りを、わたしたちの祈りとして祈ることはできないが、「罪なくまたきよらかなイエス・キリストの心にもとづいて、また信仰においてわれわれがともにあずからせていただくキリストの無罪性にもとづいて」祈ることができる。ここにも信仰の決断がある。

聖書全体はキリストによる救いの証しであるから、そのなかから金言として聖句をとり出して聖書全体から孤立させて、精神修養の資料にするようなやり方は、聖書の読み方ではない。「聖書は、全体として神の啓示の言葉である。限りもない内なるつながりにおいて旧約聖書と新約聖書、約束と成就、犠牲と律法、律法と福音、十字架と復活、信仰と服従、所有することと希望することとの関係において、はじめて主イエス・キリストに対する十全な証示が聞きわけられる」信仰は、この証示につながっているのであって、ここから告白がうまれ、さんびが出る。信仰は、証示によって、キリストによって救いをあたえたもう神の無限の愛に圧倒せられ、信仰による神への服従に押しやられる。そのとき、さんびは礼拝者全体の口から出る。それは、占い歌ではなくて、「新しい歌」である。「神は、一つの偉大な讃歌をご自身のために永遠に備えたまい、神の共同体に入る者は、こ新しく創造せられた者たちの新しい歌である。

今月の家庭科

デイトのエチケット

デイトのエチケットを学ぼう

これからの若い人の結婚は次第に自分で相手を決める自律婚（恋愛・自由結婚）が多くなってくる。戦後に結婚したある団地夫婦では、七割までが自律婚をしている。自分の一生に重大な影響を及ぼす結婚は、当然当事者自身の責任によって決めるべきであって、他人まかせのような子供っぽいことをすべきではない。

そこで自分で相手をみつけるためには当然自由な男女交際の時期を経て、いよいよ二人だけで時を過すデイトの時をもたなくてはならない。上手なデイトをする人が、幸福をもたらすよい相手をみつけることができる。そのためにはこれからの若い人は必ず「デイトのエチケット」というものを心得ていなければならない。エチケットを心得て、正しく、美しく交際して結婚の意志を決めるならば、若い人は新しい知恵によってよき相手を見出しうると思う。親はそのことを信頼して、子供たちにデイトのエチケットを幼い時から教えておかねばならない。泳ぎ方を知っていれば必ず向う岸に自分の力で泳ぎつけるものであることをこれからの親は知らねばならぬ。

日高パーティ

わが国にはこのようなデイトのエチケットを教える本がなかったが、最近日高パーティとして知られている日高孝次教授と艶子夫人が共著で「**デイトから結婚まで**」（紀元社、二八〇円）という非常にすぐれた指導書が出たことは喜ばしい。序文によると、日高パーティは毎月一〇回以上開かれて一五年間に及び、出入りした青年男女は何と二万人を数え、何百組かの夫婦を世に送り出したということである。もちろん日本にはこのような形でのデイトの機会は少いが、教会や夏のキャンプはある意味ではよ（決してそれが第一目的ではないが、デイトへの機会となるのであるからこのような日本の体験から生れたデイトの知識を学んでおくことは有益に違いない。又仲人や結婚指導する人は必ず知っておいて青年たちを導くことが大切だと思う。

試みのデイト

デイト（date）とは一人の男子と一人の女子とが「何日にどこそこで会いましょう」と日取りの約束をすることである。ここで取扱うデイトは結婚に発展するかもしれないし、又しないかもしれないという莫然としているがあわい、不安な、しかし楽しいデイトのことに限りたい、つまり「試みのデイト」であって、男女二人が一緒に出かけたら、直ぐそれを結婚に結びつける必要はないし、さりとて全然結婚する意志なしのデイトは本来のデイトの意味からははずれる。やはり、もしかしたら結婚に至るかもしれないという可能性をひめたもの、それだけに責任を伴うものであり、しかしデイトの結果、結婚しなくても少しも非難さるべきものではないといった甚だあいまいもことした状態である。こういった試みのデイトについて、日本の青年は従来馴れていないが、これからはこういったルールとかエチケットを互いに作り出していくことが望ましい。

何回ぐらい会うか

こうしたあいまいな試みのデイトの回数は何回ぐらい続けてよいだろうか。日高夫妻は日本の場合は大てい二度までであって、三度目のデイトをするということはお互いに相当結婚への責任を感じていなければならないと

かし注意しなければならないのは、とりなしの対象になる兄弟を上から見下すのではなく、兄弟の苦しみに圧倒されて、それを自分のものと考え、「キリストのみまえに立って、キリストのあわれみをわかちあう」ことを中心とするということである。

試練は、みことばの瞑想において、祈りにおいて、しのびよる。悪の力は、みことばの力をおそれる。だから、わたしたちが、神のみことばにちかずけばちかずくほど、それを妨げようとする悪の力の活動ははげしくなる。キリスト者が試練をもたないことが一番の試練であるとルターがいっているが、試練のなかにあって神への信頼は強められる。みことばの瞑想も、祈りも、悪の力とのはげしいたたかいのなかでもたれるのである。キリストにおける交わりのなかではじめて、ひとりでいることの意義がわかり、その生き方のはげしさを知るのである。

互に仕え合う交わり

エペソ　四：一―一三

キリストにおける交わりが、この世で考える交わりと質的にちがっているなら、そのちがいが前面に出てくるはずである。しかし、注意したいことは、わたしたちの問に対する答が、公式とせられてしまってはならないということである。キリストの血のかよっているみことばが、公式化されるために、どれほど力を失ってしまったことであろう。公式化されたキリスト教と実生活とがきりはなされてしまうことは当然で、公式は、必要なときとり出され、必要でないとき、都合の悪いときは、しまいこまれているのである。キリスト教が、激変する社会の後からノソノソ歩いて行くのは、このような公式化されたキリスト教になりさがっているからではないであろうか。キリストの肉と血とをなまのままいただいて生けるキリストと出合う日々をもつならば、キリストにおける交わりの本質は、もっと前面に出てくるであろう。

まずキリストにおける交わりは、暴力を追放する。暴力は武器のみによって暴威をふるものではない。舌の暴力がある。これらの暴力の追放は、わたしたちに自分を愛するように他者をも愛させるのである。自分を愛するとは、どういうことになるのであろう。ルターによれば、「自分をいちばん、憎むことが、自分を愛すること」である。わたしたちは、元来、自分だけを愛する者で、自分を憎むなどできない。しかしこのような自分は、神を愛さないのである。だから、もし自分を憎むことができるとしたら、それは神をいちばん愛することになるのである。これは聖霊のはたらきによるほかに道はない。

このことからいえることは、他者を愛するとは自分を憎む者となれと証しすることにほかならない。それは、そうすることにより神を愛する者となりうることをすすめていることになるのである。

自分を憎むことができる者にしてはじめて、他者の言いぶんをきく心をもつのであり、自分を憎むことのできる者にしてはじめて、自分の領分から外に出る勇気をもつのである。さらに、自分を憎むことのできる者だけが、本当に他者をゆるし、他者の重荷を負うことの決断ができるのである。

このようなことは、社会通念からいえば、夢である。しかし、この夢とみなされるものこそ社会通念を破って、社会に革命をもたらす力である。イエスの力は、創造の力であるが、言葉をかえていえば、人間革命の力である。（日本福音ルーテル教会議長　岸　千年）

八月の婦人会

地の塩

聖書　マタイ五・一三。

イエスは「あなたがたは地の塩である」とおうせられました。キリスト者の社会に対して負うている使命がよくいい表わされていると思います。

なくてならないもの

生命を保っていく上に塩はどだいじなものはありません。もし人間のからだから塩分がきれたならば、すっかり元気がなくなってしまいます。大岡昇平の「野火」という小説に、フィリッピンの山奥に逃げこんだ兵隊が塩に窮し、民家から盗んで、それを宝のようにたいせつにすることが書いてあります。ほかのものがどんなにたくさんあっても、塩がなければいのちは保てないからです。これは人間だけでありません。動物でもそのようです。放牧されている牛や馬は、夏になると塩の不足に悩んでいます。飼い主が塩を器に入れていくと、狂気のように群がってまいります。阿蘇の草原で夜分にテントを牛に襲われたことがありますが、これも味そやしょう油の香りをかぎつけてきたものとわかりました。弱りきっているからだに食塩が注射されて、ほのぼのと生気が顔に出てくることもあります。キリスト者は社会に対して、そのように、なくてはならないものであるというのです。なぜでしょう。

味をつける

塩の第一のつとめは物に味をつけるということです。砂糖はなくても食べられます。しかし塩気のない味はまずくて口に合いません。味かげんを「塩梅」（あんばい）ともうしますが、このことから考えても塩がどんなにたいせつであるかがよくわかります。わたしたちの住んでいる人間の世界は、そのままでは、味わいのないものです。わたしたちはそこに味をつける役目をいたさねばなりません。わたしたちがいるということによって、なんともいえない楽しさが生じ、喜びがそこにかもし出されるというふうでなければなりません。家庭であっても、信者がいる、ただそれだけで、どことなく明るくなり、みんなのものが「いのちのよさ」を感じることができるというものでありたいと思います。

くされを止める

塩は腐敗を防ぐために用いられます。昔ガリラヤ湖でとれた魚は、これに塩を施して遠く奥地に運ばれたといわれます。塩はくされをとめる役をいたします。わたしたちの社会も、ほっておけば、必ずくされてきます。政治であっても、産業であっても、また文化のようなものであっても腐敗するものです。現に、わたしたちのまわりには、そうしたもののくさった臭気が鼻をついているではありませんか。それをそのまま放置しておくならば恐ろしい結果になります。キリスト者のはたさねばならない役割は大きいと思います。レッキーという人が「欧州道徳史」という本を書いて、「ローマが滅びたのは必ずしも偉大な政治家がいなかったからではない。またえらい軍人がいなかったからでもない。聖者がいなかった（みな堕落して）からだ」といっています。考えさせられるではありませんか。神はアブラハムに約束して、あの堕落腐敗したソドムであっても、そこに一〇人の義人がいるならば、それを滅ぼさないだろうとおおせになりました。キリスト者は、その地域社会の生きた良心です。社会の腐敗を止め堕落

教えている。つまり三回目を承諾した時にはお互いに「結婚」という言葉を口にして、そのつもりがあるか否かをさぐり合い、又は家族にも紹介する義務がある。私が見聞したアメリカのデイトも大体そんなところであった。いざという時にぐづぐづしてあとで後悔するのが日本の娘さんの常であるが、これからはこうしたことがはっきりした方がよい。

申込み方

デイトの申し込み方やその機会は千差万別で一概には言えないが、第三者の紹介があれば確実である。（だから見合のあとの第一回デイトもこれに入るといえる。やはり男子から誘うのが常識で、こればかりは女尊男卑のアメリカでもどうにもならないらしい。しかしごく親しい友人の間では女子から誘うことも稀には許される。

「何月何日、何時に、何処で」とはっきり時と場所を告げ、時間におくれぬよう。

男性と女性の違い、断り方

デイトを申し込まれたら必ず受けねばならぬということはない。いやな相手だったら断ってもいいのである。この点で男性と女性の間に微妙な違いがある。男性は相手が一応容姿端麗なら大ていどんな人ともデイトできるが、女性は「好きなタイプ」と「嫌いなタイプ」がはっきりしている。彼女らは本能的・直観的に好き嫌いを嗅ぎわける。この感じは結婚した後の幸不幸に非常に影響するから、真剣に考えて、女性は自分に忠実であることをすすめたいし、男性は断られてもガッカリすることはない。自然に行けば女性の方が三倍断ることが多いものなのだから。

断り方にもエチケットがある。あまりズケズケと「私はあなたが嫌いですから」などといって男性の自尊心を傷けるものではない。「ちょっとその日は都合が悪い」とか、「他に会う人がいるから」とか遠廻しに断る。三回申し込んで三回とも断られたら、男性の方でも、これは俺に気がないのだなとあっさりあきらめるべきである。

デイトの会話と観察

会話というのはこれからの社交術になくてはならないものの一つで、私が調査したアメリカの女性の意見でも「相手を飽きさせぬ上品でユーモラスな会話の出来る男性」というのがトップを占めていた。会話を通じて相手を知り、且つ自分自身を知らせるのである。愚にもつかぬ噂話やゴシップを避けて、生れ育ち、趣味、人生観などを語り合う。クリスチャンの場合は当然信仰の問題や、教会生活の話をする。信仰や人生観の違いは将来非常に深刻な不一致を誘う原因になるから慎重に考えねばならぬ。しかし誰でも初めから一致している人は少い。その不一致を相手はどのように処理するか、独断型、追従型は共に避け、一致への努力ができるパーソナリティであるかどうかを観察する。

家庭への紹介

第一回、第二回のデイトでどうなったかは親は非常に気にしているものである。秘密に会うのはもちろんいけない。親の諒解の下に堂々と会い、帰宅の時間を予め告げ、それより少し早目に帰り、親にもあいさつすべきである。最初の二回ぐらいは親もあまり根掘り葉堀り聞かず、又妙に気を廻して黙っているのもよろしくない。また子供の方でも親の気持を察し、親の助言を求める意味で積極的に話しかけた方がよい、もし結婚に至れば親同志は無理やり親類づき合いさせられてしまうのだから、親の人権も尊重してやろう。

こうして二回にわたる「試みのデイト」の時期にジックリと考え、イエスかノウを出す。一発必中を狙わず、できるだけ多くの相手とデイトの機会をもって、その中から「これで行く」といった相手をつかむようにすすめたい。

（岩村信二）

CS部ニュース

日本からも お医者さんを送ろう

今年度の教育週間は九月一七日の日曜日から二四日の日曜まで行われます。

主題　あなたの隣人を愛せよ
聖書　マタイ二五・四
献金主題　日本からもお医者さんを送ろう
目標額　二〇〇万円

日本の教会学校の生徒もミッションマインドをの呼びかけで、一昨年はフィリピン、ついでアフリカの友のために献金をして来ましたが、今年はA・A諸国（アジア、アフリカ）の友のために、日本からもお医者さんを送ろうということになりました。

これは、アジア、アフリカの人たちから「なぜ、日本人は私たちのところに来てくれないのか、同じ地域の民族なのに」とのチャレジがなされたことで奮起したキリスト者医科連盟の先生方が、それに応えて要請国に日本からお医者さんを送る計画を立てました。

しかし各地からの希望はぞくぞく来、また行きましょうというクリスチャンのお医者さんや看護婦さんはあるのに、肝心の費用がまったくたらないのです。医療材料費、生活費、旅費などかかります。先日やっとインドネシヤに梅山猛博士を送ることが出来ましたが行くだけで二一〇万円余かかっています。

すでにネパールには二人の看護婦さんが行っており、間もなくお医者さん一名が行く準備をしていますが、まだまだ現地にお医者さんを送り出さなければならないのです。

独立のために何度も同民族の中で血を流したコンゴからも、また中共軍の侵入や、内戦などでたえず戦争のあるラオスからも、またアベベ選手の国のエチオピアからも、世界一高いエベレスト連峯をもっているネパールからも、日本人のお医者さんをよこして下さいという願いが来ています。小児マヒをはじめとし、癩病、奇妙な皮膚病、その他あらゆる伝染病が、時期を問わずに発生し、癒される時もなく死んだり、急性の病気に手術する所もなくてうち捨てられているこれらの国の人々を助けるには、日本人のお医者さんが一人でも多く行かなければならないのです。

かって黄熱病の研究と治療のためにアフリカに渡って、自分もその病気でたおれた野口英世博士のことを、アフリカの人々は忘れてはいません。いつかまた日本からお医者さんが来てくれるとの希望をもっているのです。

日本の教会学校の子供たちが、やがて大きくなり、その中から立派なお医者さんとしてこれらの国へ出かける人もいるでしょう。しかし、今、彼らたちは待っています。そこで日本の子供たちの手でお医者さんを送ろうと、今年の教育週間の献金は、このために献げることとなりました。

教育週間には「あなたの隣人を愛せよ」の主題を、いろいろの角度から徹底させると共に、各地でこの献金運動を起して下さること期待します。

へんしゅうしつ



「キリスト教教育と科学の問題」を取り上げるに当り、次元の違いから生じる誤解や、また筋の通った学説も新にされる可能性のあるものであることの理解の仕方や、理論と信仰の平行線を近づけることの危険を考えながら手をつけたのは今日の中学生の疑問を彼らの成長過程にありうることと見送ってしまいたくなかったからです。

今回は神学者の、またキリスト教教育の立場からの文を掲載いたしませんでしたが、読者の方によってその答えがなされる事と存じます。

編集の途次思うことは、神のみ業、力はまことに人のおもいにすぐるものであり、信仰への飛躍をキリスト教教育は、盲目の信仰へでなく、聡明なる信仰へ導かなければと……。

この号に予定しました原子化学の分野からのお答えが期日に間にあわず掲載できなかった事は非常に残念でしたが、高校生の疑問を特集をする時に取り上げるつもりでおります。

「キリスト教教育と科学の問題」は掘り下げれば掘り下げる程、多くの問題がありますので本誌の課題から各教会、各読者がそれをさらに正しく展開されればと願っています。

を防いで、それをきよく正しく保っていく力とならねばなりません。

きよめる

塩はただ消極的にものの腐敗を防止して、それを保存するだけではありません。さらに積極的にものをきよめるために用いられます。日本の神道などでは、きよめの行事に塩がつかわれています。何か不吉なことがあったり、おもしろくないことが生じたりすると、そのあとで塩をまいて、いわゆる「縁起なおし」をする風習もあります。おすもうさんが土俵で塩をまくのも、そこをきよめるためです。葬式などから帰って塩で手をきよめる習慣も未だ残っています。塩で歯やその他を清潔にすることは今でも行われています。とにかく、塩はけがれたものをきよめるために使われます。わたしたちキリスト者も、地の塩として、世の中をきよめていかねばなりません。今日の社会には、たくさんのけがれたことや、きたないことが平気で行われています。キリスト者はそれをだまって見ていてよいでしょうか。イエスはけがれた宮をきよめられたではありませんか。明治以来、わたしたちの先輩は、このために戦ってまいりました。純潔運動や社会風教の改革のために大きな戦いをつづけてきました。古代のキリスト者も異教の風習をきよめて、それに尊いキリスト教の意義を盛り、まったく新らしいものに造り変えました。わたしたちも、周囲の風習であれ、行事であれ、そうしたものをきよめていくために、もっと積極的に戦わねばなりません。手をつかねて見ていてはならないと思います。

黙々と働く

塩は実にすばらしい働きをします。しかし塩が働くときの静けさはどうでしょう。音ひとつたてません。煙のかげも出しません。地の塩としてのキリスト者がこの世に対して働くときも、このようにありたいものです。口にあわをとばして、議論はさかんにする。しかし実行はいっこうできない。これではまことに恥ずかしい。それと共に、自分のなにかやったささいな善事を、これ見よがしに吹聴したり、宣伝したりするとすれば、なおいっそう恥ずかしいことだと思います。安部磯雄先生がよく話されたことですが、先生は青年時代米国に留学中、さらに欧洲に渡って勉学したいと願っていました。けれども、先きだつものは金で、それができずに悩んでいました。だが、そのことを知った神学校長は、近所の婦人に相談して、道をひらいてくれました。「君のために経済上の世話をしてくださるかたができた。心配せずに欧洲にいきたまえ。二か年間の学費と生活に要する費用の全部、彼地への旅費、彼地から日本への旅費もすべて出してくださるのだ」。この校長のことばに先生は天に登る心地でした。「先生、そのおかたはどなたでしょう。一度おめにかかってお礼を申し上げたいのですが」「いや、その必要はない。先方は名を告げないでくれとのことだから」。こうして先生は欧洲に渡り、愉快な勉強ができました。約束の金は少しのおくれもなく月々神学校長から送ってきました。それから数十年を経過し、先生の晩年になっても「わたしは今もってあの大恩人の名さえ知りません。将来どうなるか、海のものとも山のものともわからない、近くにいたとはいえ東洋の一介の青年のためにばく大な費用を出してくれました。わたしが天国に入ることを許されるならば、いちばん最初におめにかかりたいのはこの人です」と先生特有の人なつこい顔を輝かして語られたものです。おくゆかしい話ではありませんか。最後に、塩はどんなに小さい塊であっても、独特のからさをもっています。日本のキリスト者は数は少いかも知れません。だが、小さい群だからといって恐れる必要は少しもありません。本来の面目を発揮することに、ひたむきに、励みさえすればそれでよいのです。**山内六郎**

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年八月一日発行
発行人　山北多喜彦
印刷所　精文堂印刷株式会社

教会教育　第九七号

定価四〇円（〒共）
八月末日まで
一年分　四五〇円

発行所
東京都中央区銀座四の二
日本基督教協議会　教会学校部
振替東京九八七一三番